

2010年度学校法人立命館総長選挙

「総長候補者討論会」

日時：2010年10月19日（火）

主催：総長選挙管理委員会

中田 定刻になりましたので、始めさせていただきますと思います。今日は、御多忙の折にも関わらず、2010年度学校法人立命館総長選挙・総長選挙管理委員会主催・総長候補者討論会にお集まりいただき、ありがとうございます。ただ今より、討論会を開会いたします。本日の司会を務めさせていただきます選挙管理委員会副委員長の理工学部・中田と申します。何卒よろしく願いいたします。

なお、本日の討論会は朱雀のホールを主会場とし、衣笠・BKC・APU および慶祥にテレビ会議システムにより同時配信をしております。キャンパスでの皆さまにおかれましては、配信のみという点で不自由をおかけいたしますが、大変恐縮ではございますが、あしからずご了承いただきますようお願いいたします。

では、討論会を開催するにあたりまして、総長選挙管理委員会委員長の市川先生より、ご挨拶申し上げます。よろしくお願いいたします。

市川 選挙管理委員長を務めております法科大学院法務研究科の市川です。選挙管理委員会主催の総長候補者討論会の趣旨ですけれども、これはすでに公表されています実施要項の趣旨のところにありますように、総長候補者の見解や人柄等に関する情報を提供することにより、有権者が総長像や学園課題の認識を深め選挙人の投票行動の参考とするということを目的にして、本日の討論会を開かせていただきました。この総長選挙の施行細則では、選挙管理委員会では委員会が必要と認めた場合、この総長候補者による討論会を開催することができるということで、討論会を開くということは、規定上は必要事項ということになっているわけではありませんけれども、選挙管理委員会といたしましては、より民主的な総長選挙を実施していくという新制度の趣旨を踏まえまして、このような候補者の討論会を開くということが必要であろうという判断で開かせていただいたわけですが、討論会にお越しいただいた候補者の先生方には御参加いただきまして、選挙管理委員会としてお礼を申し上げたいと思います。それから、こういう形で討論会を開きましたので、是非有意義な討論会にしたいと思います。

選挙管理委員会が開く討論会ですから、公平さには留意をしつつも、中身の濃い、実質的な検討といえますか、議論をなされる場にしたいという風に思っています。一方で、運営原則にありますように、節度という点も必要ですので、その点は御留意いただきながら御協力いただければと思います。ということで、簡単になりますが、選挙管理委員会からの挨拶ということにさせていただきます。今日は、どうもありがとうございました。

中田 市川先生、ありがとうございました。では、早速ではございますが登壇者の紹介に移らせていただきたいと思います。候補者の50音順に紹介をさせていただきたいと思います。最初に、川口清史候補、坂根政男候補、谷口吉弘候補です。なお、もう一人の候補者であります飯田健夫候補につきましては、本日 NEDO、独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構でございますが、評価委員という公務があるため、やむを得ず御欠席

という御連絡を頂戴しております。この点、御了承頂ければと思います。

まず、ただ今御紹介させていただきました候補者の皆さまより自己紹介を兼ねて、今回総長候補者として推薦されましたことについて、それぞれの方から 5 分程度、ご挨拶及び所信表明をお願いしたいと思っております。なお、後にできる限り多くの質問をお受けしたいと思っておりますので、恐縮ではございますが、所信表明は時間をお守りいただくようお願いいたします。50 音順で大変恐縮ではございますが、川口候補から最初をお願いしたいと思っております。よろしいでしょうか。そうしましたら、川口候補、お願いします。

川口 皆さん、こんばんは。川口清史です。今日、この場で皆さんとこのように語り合えることを大変嬉しく思っております。私が総長に就任してから 4 年が経ちました。大変、苦しいことも多かったんですが、それでもこの間、難関分野、あるいはスポーツ、学術、文化といった分野で、国内外において学生諸君が大変活躍してくれました。学生諸君は、大変たくましく成長し、学園の構成員や父母、教員を励ましてくれました。この 4 年間で学んだのは、やはり私たちの原点は学生の声に立脚するということです。私は、この原点に立って、そこに依拠して進んでいきたいと決意を新たにしております。できれば今、まさにターニングポイントにあります。変化の激しい時代ですが、今こそ私たちは、前に進む時であると考えております。今、私たちがやるべきこと、それは学生が学ぶ喜びを実感しながら学生生活を送れるよう、教育の質を高めること。そして、そのためのキャンパス創造であると考えています。私は、みなさんと共に新中期計画を作り上げ、その実行に責任を負いたいと思っております。キャンパス創造については R2020 中間地点である 2015 年までには、実現する決意であります。教育の質向上のためには、日々現場で行われている学部、研究科、学校における営みを豊かにすることしかありません。こうした取り組みと、新しい教学展開を合わせたものこそ、総合的な計画、新中期計画であります。私はとりわけ、立命館の学びのコミュニティを実現させたいと思っております。これは、教える場から、学ぶ場への転換を図ることを意味しています。学びの場を実現するためには、様々な制約を乗り越える、新しい教育の仕組みが必要です。そしてまた、課外自主活動の拠点、憩いや語らいの場といったアメニティの向上も同時に解決することが必要です。

ここで改めて考えたいことがあります。学生たちの学ぶ意欲に私たちは応えていることができているかということです。入学した時、学生は希望に満ちています。今、全ての学生、生徒、児童が学ぶ喜びを噛みしめながら、成長を実感できる、そうした教育を私たちは実現できているだろうか。教職員のみなさん、厳しい社会状況の中、進路が決まらない学生の不安や悩みがどれだけ大きいのか、今日一日の活動を思い描き、駅に到着した途端、バスに乗れない状況、午後からの授業に向けて満足に昼食も取れないような状況が学生たちの現状です。この切実な声を私たちが本気で受け止め、質向上に向けた取り組みを進めなければなりません。立命館大学においては、新キャンパス構想によって衣笠、BKC がさらに発展すること、学園全体の将来を見通した展望を描くこと、これが我が立命館にとっ

て最良の道であると私は信じています。APU は、立命館の宝であり、日本の宝です。世界中の学生が政治に貢献できるトップ水準の大学です。我が国で、そして世界で本当に望まれる存在としてさらに飛躍するために、全学で APU を支え、ネットワークを強化するために全力を尽くします。付属校においては、教職員のみなさんの努力により、世界のモデルとなる一貫教育を実現するために先進的な教育が展開されています。これを大学と連携を重視した全学園のものにすることが重要です。それぞれの学校の個性を生かし、尊重しつつ、各校の将来のあり様を全学の課題として、私は責任を持って考えていきたいと思っています。改めて私たちがやるべきこと、それは、あらゆる改革を学生、生徒の成長と結びつけ、前進していくことです。厳しい経済状況の中、学費の重みは深刻です。学費に見合う教育を追求するとともに、学費のあり方そのものにも、抜本的な検討を加えなければなりません。私たちの前には課題が山積みです。しかし、大切なことは、政策の一つ一つが学生の成長を実現するためのものであるかどうか、です。答えがイエスであれば、ためらいなくそれを実行しましょう。答えは、私がこの取り組みの先頭に立って、そのために全力を尽くす所存であります。

最後に学生生徒のみなさん、“Creating a future beyond borders”、これは 2020 年に向けた学園ビジョンです。是非皆さんと一緒に様々なボーダーを越え、一人一人が未来を作る学園を作っていきたいと願っています。ありがとうございました。

中田 ありがとうございました。続きまして、坂根候補よりお願いします。

坂根 はい。ただ今、御紹介いただきました坂根でございます。総長候補に推挙されてから、推薦されてから、立命館大学は一体どういう大学なんだろう、立命館学園はどのような学園であるべきなんだろうということを考えさせられました。行きついた結論は、大学の原点に戻るべきであるということです。大学の原点とは、言うまでもなく、教育と研究を実践的にやる場でなければならないと思っています。

では、教育と研究は、どういう風にすれば活性化し、みなさんが生き生きと生きられるんでしょうか。学生さんは、立命館大学に来てよかったな、本当に 4 年間、修士の方は 6 年間、大学へ行って、立命館大学に来て良かったな、付属校のみなさんは、立命館中高に来て良かったな、小学校のみなさんは、本当に小学校に来て良かったなというような学園はどうしたら作れるんでしょうか。それは、現場主義でないと実現できないという風に思っています。私は、この 3 年間、理工学部長として理工学部の教育の場に関わってきましたけれども、それを実感をもって語るができるという風に思います。

立命館学園は多様な学生を、多様な学生が集まる場であるという風に言われていますが、一体何が多様なんでしょうか。その答えを今まで分析的に答えられた方はいないと思います。理工学部の執行部のこの間の議論を通じて、一体何が多様なんだろうという、極めて実践的な教学改革をしてきました。それで出した結論は二つです。一つは、一体学力にど

の程度の多様性があるのだろうか。一体、個々の学生さんのキャラクターや思いにどれぐらいの多様性があるのだろうかということを執行部で議論しました。そして、前者については、そうだ、そうすれば学力の多様性は、一年生のガイダンスの時に一回測ってみようという提案をしようということになり、数学と物理と化学の学生さんには申し訳なかったけれども、オリエンテーションの時間に試験をさせていただきました。そして、学生さんの思いや感情や、そういうものについて物理科の先生方が、分かった、我々が物理の学生さん全員を一度面接してみようということで、面接していただきました。一人、1時間または2時間、先生の部屋に呼んで、一生懸命思いを聞いていただきました。学生さんは最初、非常に緊張したようです。それはそうですね。教授の部屋に呼ばれて、何か思うことがあったら言ってみると言われるわけですから、喋るわけがないと思います。ただし、1時間ぐらいすれば、ポツリポツリという風に話したということでした。

前者の試験については、非常に幅広い学力差があるということが認識されました。後者については、非常に色々な思いを学生さんが持っているという風に感じました。そして、これらの学生さんを本当に立命館に来て良かったなという風に教育、一緒に学ぶことについては、やはり教室で何が語られ、教室から出て何が語られ、本当に個々の学生さんに見合った教育をしないとイケないのではないかとというのが我々が得た結論です。したがって、理工学部では今、そういう取り組みを始めています。具体的に言えば、それは物理駆け込み寺という個々の学生さんの学習到達度に見合った教育システムを取っています。また、嬉しいことに数学科は、数学も今年は学習相談会をやるよという風に言っていただきました。また、電気工学科は、一回生の個々の学生さんの感情や思いや到達度を一回電子媒体で作ってみようという提案をしていただきました。これらの提案はすべて近い将来、個々の学生さんの到達度に見合った教育に必ず役立つと思っています。というように、やはり個々の学生さんが個々の到達度にあった学習をするには、そういうきめ細かい学習指導が必要であると思っています。これらは、理工学部が考えております2012年度の教学改革に接続教育としてももう少しシステムティックに取り組まれる予定になっています。

今まで申し上げたのは、理工学部の例ですが、これは理工学部だけに適用できる方法ではないと思います。中高、APU、そして大学、その他すべてのところに適用できるのではないかと考えています。やはり、教育をするのは現場です。現場を大事にし、現場が実態を掴み、現場が方針を作り、現場が教育に責任を持つ、そのような学園運営をしたいという風に考えています。少し長くなりましたけれども、これで所信表明とさせていただきます。

中田 ありがとうございます。最後に谷口候補より、お願いいたします。

谷口 はい。御紹介いただきました谷口と申します。突然、総長候補に選ばれて、びっくりしているのが正直なところです。普段、私はいつも立命館で学び、立命館で教えという

長い経験をしているのですが、そういう中で今まで感じてきたこと、あるいはこれからこうあるべきだということについて、簡単に述べさせていただいて所信表明とさせていただきます。

日本が置かれている状況というのは、非常に厳しいものがございます。たとえば、アジアではそれぞれの国が高等教育に非常に力を入れています。たとえば、留学生を目標をもって獲得するとか、あるいは科学技術政策を通して国力を上げるとかという中に、現在の日本の高等教育は置かれているという状況をまず認識しなければいけないのではないかと考えています。また、御存じのような情報化社会ですから、皆様方が誰でも、世界のどこでも、いつでも瞬時に大学の情報を捉えることができまして、それをもって世界中あるいは日本の学生諸君は、この大学を選んでいるという状況です。いわゆるすべての大学の活動、教育、研究を含めたすべての活動がアジアあるいは世界、あるいは日本の学生諸君の目の前にさらされているという状況を注視しなければいけないのではないかと考えています。

現在、立命館学園では、みなさんが本当に学びがいがあり、教員職員のみなさんが教えがいが、働きがいがあのような学園づくりということで、R2020 というものに向かって全力で取り組んでいらっしゃると思います。すべての知恵を集めて、将来に向かって飛躍していこう、あるいは世界に抗して立命館学園を展開していこうという思いで、みなさんが議論されているのではないかと考えています。先ほど私が申しました通り、日本、あるいは世界の教育事情というものを注視して、国際的にも通用性のある、そういうビジョンづくりでないといけないと思っています。このビジョンの作成には、それを実現するのは皆さんです。ですので、全構成員の協力なくして、この実現は不可能だと思います。いくらビジョンが素晴らしいとしても、みなさんがそれに協力できないということであれば、このビジョンは何も意味をなしません。そういう意味で、このひとつの目標に向かって、教職協働を通して力を合わせるということが、私はこの学園にとって極めて重要であると考えています。R2020 というのは、2020 年までの計画なんです、いわゆる総長の任期は 4 年ですので、2015 年を目途に私たちは一体何をなすべきかということについてお話申し上げたいという具合に思います。一つは教育と研究を、やはり切り開く、高度な質の高い、世界にも通用するような教育・研究の展開ということをしなければ、この学園の将来については非常に難しい局面を迎えるのではないかと考えています。これは、日本の高等教育は、日本の大学が置かれている状況であろうと思っています。それから、それだけではよくございませんで、それを補修する人的な要するに支援と申しますか、あるいは教職、教員、あるいは職員の増強というものがこれに裏打ちされていなければ、この問題は実現できないのではないかと考えています。さらに、その人だけではなくて、人的な資源ではなくて、そこに置かれている環境条件、どういう場所で、どういう展開をするのかということが必要でございますので、やはりゆとりあるキャンパスというものも、是非実現するというのが 2015 年を目途に必要だろうと考えています。

その中で、教育の展開につきましては、先ほど申しました通り、広く日本とか世界から支持をされるような、またその要請に応えられるような学びの仕組みということを展開する必要があります。そのためには、立命館大学が長年培ってきた小集団教育というものを軸にして、どういう展開が可能かということを考える必要があると思います。このような不確かで不透明な時代を生き抜くためには、ぜひとも要するに教養教育を通して倫理観の高い学生さんを育てるということが必要であろうと思います。また、国際社会に抗していくためには高いコミュニケーション能力が要求されるようでございます。そのためには、一年生から四年生までを含めた小集団教育の自主的な強化ということが非常に重要になってくるのではないかと思います。また、GCOE に代表されるような国際化の課題というのは、立命館アジア太平洋大学がその先例に学ばなければならないと思いますし、APU と強く連携した形で国際化を進めるということが、大変重要であろうと思います。これが教育の視点でございます。

研究ということも非常に重要でございます。教育と研究は両輪でございますので、研究にはやはり大学院生を、大学院教育をからませながら展開をするということが必要だと思います。それから、若手研究者、それから当然先生方の研究という、重層的な中で大学院教育を含めて展開をしていくということ。しかも研究は戦略的に展開をしていくことが私は重要であろうと思います。個人的な研究基盤の整備は、重要な課題でもございますが、国の戦略的なプロジェクト、あるいは国が日本の国家が成っていくための科学技術政策がどのように立命館大学が関わっていくのかということで、国に貢献していくという大きな大学の使命があるかと思います。そのような研究の戦略性を用いて、大学院教育をからめる。その中で、世界にこの研究成果を発信していくということが非常に重要であろうと思います。

それから、立命館の特色は、社会に広く支持を得ているということがあろうかと思います。そういう立命館の特色というものを使って産学連携を通して、一層の教育力の、研究力の強化を図って、社会の期待に応えることが今求められているのではないかと考えています。これらの教育・研究の展開というのは、先ほども申しました通り、ソフトとハードの両面からゆとりのある環境整備が必要であると考えていますし、そのための ST 比の改善が最優先にしなければならない課題でありましょうし、キャンパスのゆとりという問題についても、学生生活を豊かな、要するに生活を保障するという意味からも極めて重要な課題であろうと思っています。とりわけ、衣笠キャンパスにおける狭隘化ということは、学園ビジョン R2020 で是非解決しなければならない優先課題だと位置づけています。学生生徒が学ぶ立命館、あるいは教育がゆとりを持って教え、働きがいのある学園創造を生み出すためには、ハード面ということに取り組むと同時に教職員がゆとりある時間を生み出す仕組みということが必要だろうと考えています。そのためには、学園政策への全構成員の意見の反映をどうするのかということも含めて、管理・運営についての新たな視点が必要であろうと考えています。立命館の建学の精神は、自由と清新、それから教学理念は平和

と民主主義ということで、長く大学が進んで、展開をしてまいりました。今後一層の一体感を持って、ひとつの目標に向かって協力をするということが、この夢の R2020 の実現に関わっていると思っています。今次の新しい総長選挙を現在実施されているわけですが、このことによって学園関係者相互の信頼回復の道が開かれて、立命館学園で学ぶ生徒、学生、教職員すべてが新しい総長のもとで一致団結して、この新しい教育と研究の取り組みに参加されることを切望いたしまして、私の所信表明に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。

中田 ありがとうございます。なお、本日御欠席の飯田候補でございますが、飯田候補の御協力のもと所信表明をあらかじめビデオ撮影させていただいております。ただいまより、その模様を上映させていただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

飯田 総長候補者の飯田健夫と申します。実は数カ月前に委員会が決定されておまして、学園の皆さまには大変失礼な形での参加となり、申し訳ありません。私、総長候補者に推薦されてから、総長に求められる要件というものを考えていました。大学、特に、私学を取り巻く厳しい環境の中で立命館学園を維持・発展させていくためには、国内外の教育・研究機関との連携を含めた強力な指導力と社会情勢に対するバランス感覚が総長には求められると思います。さらに、学園の運営を的確に遂行するためには、学園に関するもろもろの情報を深く理解していることも必要だと思います。このような総長像に対し、私の現在の心境を述べておきたいと思っております。

私は現在、副総長を務めておりますが、学園在籍は短く、また 2006 年に一度退職し、数年間学園の中核から離れておりました。役職として学園に復帰後、数カ月しか経っておらず、学園の歴史やこれまでの取り組み、さらには海外を含めたグローバルな教育・研究情勢に精通しておりません。予期せぬ候補者に指名されて、数日間、本学に課せられた諸課題を的確に把握し、その対処方針をまとめていく力は、残念ながら今私は持っていません。私を推薦していただいた教職員の皆さまに対し、大変失礼な発言かもしれませんが、正直なこの気持ちを察していただければと思います。以上が総長候補者としての私の基本的なスタンスです。なお、せっかく時間をいただきましたので、この場をお借りいたしまして、私が日ごろ感じておりますことを 2、3、述べてみたいと思っております。まず最初に、立命館は立命館 1 学園にとどまらず、その一挙手一投足は全国の教育機関が注目しているところという社会的な影響を十分に考慮することが大切だと思います。したがって、教学優先の立場を貫くことは、もちろんのことながら、研究面においても、また大学の大きな使命でもあります社会貢献、地域貢献にも積極的に取り組むことが大切だと考えております。次に今、新キャンパスについての議論が進められておりますが、参加参画、あるいは全員合意という言葉が使われております。参加参画の精神のもと、全構成員による議論の中で不明な点多々指摘され、その点に関する詳細の検討が行われるなど参加参画のシステ



ムの機能が有効に働き、私はそれを高く評価しております。しかし、全員の合意というのは、現在のような立命館学園のような大きな組織では事実上、不可能であり、どこかの時点で決断をしなければならないと考えます。結果として意にそぐわない結論が出て、学園の一体性は維持され、学園の活性化を減じる要因となつてはいけないと考えています。

さらに学園執行部と教職員との間の信頼回復の問題も聞き及んでおります。双方が努力していることは理解していますが、双方がいつまでも不信感を抱いていることは学園の発展、将来にとって大きなマイナスになると思います。まず、この課題について双方が歩みより、全力を挙げて民主的な対話でもって解決することが非常に必要であると強く認識しております。教育・研究機関で、相互不信や組織の対立が発生した時、一番の被害者は学生であるということを忘れてはいけないと思います。

最後に現常任理事会において設定されている今述べた課題を含む様々な諸課題を引き続き、丁寧かつ着実に進めていけるように私の任務を遂行していくことをお約束して、私の所信表明とさせていただきます。ありがとうございました。

中田 はい。それでは、次に移らせていただきたいと思います。なお本日各会場におきまして、各候補者の推薦理由を掲載した選挙公報を配布しておりますが、本日付で各候補者の所信表明に関しましても、それを掲載した選挙公報をホームページ上で発行いたしております。それぞれご確認、御参照いただくと幸いです。それでは、本日は御出席の三名の候補者に対して、まず市川選挙管理委員長より代表いたしまして、様々な質問をお願いしたいと思います。なお、恐縮ですが、限られた時間ですので、各回答は2分程度におまとめいただきますようお願いいたします。では、市川選挙管理委員長お願いいたします。

市川 はい。それでは、選挙管理委員会からの御質問をいくつかさせていただきます。時間は少し押ししておりますが、大体30分ぐらいお時間を頂戴して、いくつか比較的大きなテーマについて候補者のみなさんのお考えをうかがいたいと思います。第一点ですが、学園の管理・運営についてということで、より民主的な学園の管理・運営を実現していくと。そのためにはどのようにしたらいいのか、それについては所信表明やあるいは公開質問状において、それぞれの候補の方が書かれているわけですが、それをまとめてお話をいただきたいということです。学園のより民主的な管理・運営をしていくためにはどうしたらいいのかということは、これは裏返していいですと、その学園関係者の、特に学園の内部の信頼回復をより進めるには、何が必要なのか。信頼醸成をより図っていくためには、何が必要なのかとこの点について、お考えを伺いたいと思います。よろしく申し上げます。

中田 そうしましたら、ただ今の内容について、先ほどは川口先生の方からお答えいただきましたので、反対側からということで谷口先生からよろしいでしょうか。

谷口 はい。突然難しい課題が当たったので、あれなんです、民主的な管理・運営というのは一体なんなのかということなんです、立命館大学が長年にわたって、要するに管理・運営をしてきた仕方というのは、これは日本の大学でも誇るべき民主的な運営であろうと考えています。少なくとも学部長理事制、要するに各学部で選ばれた方が理事ということで、それを構成する常任理事会ということは、これは私は各学部、パートの意見の反映だろうという風に思っています。そういう意味では、これは日本の大学の中では誇り得る民主的な制度だと思っています。そういうことで、特段、この内容について改める必要はないと考えております。

それで、その民主的な運営をする上で一番何が大事なのかということなんです。このキーワードは私は信頼というものにあると思います。信頼関係というか、お互いに学生諸君とか、教職員の方々の信頼を受けた上で、要するに学園のトップが色んな決断を下す。あるいは学園のトップが決断を下したものに対して、みなさんに信頼をしてもらう、こういうことが学園として、あるいは総長としてリーダーシップを発揮できるものだろうと思います。そういう意味で、信頼のないところでなかなかリーダーシップは発揮できないのではないかとそれを常任理事会が支えるということです。まず、第一に大事なことは信頼関係の構築だろうと思っています。それで、色んな経緯がございました。そういう意味で、先ほども御指摘がありましたように、いわゆる信頼関係が非常に損なわれてしまったと、一時期から含めまして、常任理事会も含めまして、この間、常任理事会というのは、みなさんが選んだ常任理事を中心に信頼回復に努めてきたと思います。私も常任理事のメンバーのひとりでございます。それにも関わらず、まだ少しこの不信感と言いますか、全学が一致してそのことに当たれないという問題があるかと思っています。先ほど私が所信表明でも述べました通り、やはり新しい総長選挙というのは公選制によって、みなさんから選ばれた方から、推薦されて私もここにいるわけです。そういう意味で、これからこの総長を選んでいただくという、これはまさに民主的な手続きではないかと私は思っています。

そういう意味で、今回の総長選挙は、非常に大事にしたい。これを民主的な運営の第一歩としたいという具合に考えています。その意味で、新しい総長のもとで一致団結して、この色んな課題に取り組んでいくことが私は求められているのではないかなと思います。ひとつは信頼というのがキーワードだと思っています。

中田 ありがとうございます。続きまして、川口候補、よろしいでしょうか。

川口 今、谷口先生が仰ったことに本当に同感なんです、私は信頼回復の取り組み、あるいは民主的な管理・運営について、本当に総長就任以来、色んな努力をしてきたつもりでございます。特に色んなそれまでの私を含めた常任理事会としての色んな取り組みの不十分性についての反省という点もかなり課題だと思っていますし、それから管理・運営の検討委員会を作らせていただいて、様々な改革の検討を進めてまいりました。そのひとつの

制度が今言われましたような総長選挙の制度であります。非常に多くの学生、教職員、父母、校友の方の参加を得て、総長を選ぶという、本当に立命館の民主主義の到達点だろうという風に思っています。さらに、今検討が進んでいるものの、まだ制度化できていない課題がいくつか残っています。大きな課題の一つとしては、法人組織としての常任理事会と、立命館大学、あるいはAPU、各学校と学校組織との権限関係の整理であるとかですね、それぞれの権限と責任、それぞれの段階での権限移譲の問題であるとか、いくつかの課題が残っています。それも今、整理が進み、制度化の準備ができていて、これはある意味時間の問題として、私は制度が進んで行くと思っています。ただ、問題はこれは今、谷口先生が言われましたように、制度を整備するというだけで本当に信頼が回復するかというと、やっぱり何かもやもやしたものが残っているのかなと。中島先生から再び、退任慰労金問題の公開質問状をいただきました。私は退任慰労金については、制度そのものについては新しい学部長理事を入れた新しい委員会で退任慰労金を決めるという制度は発足したんですね。制度は発足したんだけど、やっぱり何かもやもやが残っているというのがあるだろうと。そこをどう踏み込んで、解決していくのか。制度では済まない信頼関係の構築ということを私はやはり、次の任期の時には踏み込んでいきたいというふうに考えているところであります。そこについては、いろんな方のお知恵を拝借しながら、率直に胸を開いて、本当に不幸な事態だと思います、お互いに不信感を持っているということは、どうすれば、本当に信頼関係が構築できるのかということについては、私自身も胸を開いて皆さんとお話していきたいと思っておりますので、是非率直なお話をこれからもさせていただきたいと思っております。

中田 最後に坂根候補いかがでしょうか。

坂根 はい。非常に民主的な管理・運営は大きな課題ですけれども、先ほど申し上げましたように、何のための民主的な管理・運営なのかということをもっと考えないと行けないのではないかなと思っています。先ほども教育や研究の現場を大事にしたいというふうに言いましたが、やはり教育や研究の現場を大事にする形での民主的な管理・運営でなければいけないという風に思っています。具体的に申し上げますと、やはり学部では、大学では学部が教育と研究の現場ですので、そこは働きやすいような管理を入れないといけませんし、中高では中高の先生方や学生さんがきちんと教育できるための民主的な管理・運営でないとはいけません。小学校やAPUもそうであると思っています。

そういう趣旨からしますと、学部の権限や意見は最大限学園の運営に対して、尊重されないといけません。ただ、時によっては各学部の利害関係とか意見が非常に対立する場合があります。現在も、率直に言って、そういう時期かもしれません。しかし、なぜ対立するのかと考えてみますと、ほとんどの場合は、情報のギャップがあると私は考えています。理工学部でもかなり思い切った教学改革を2012年にやろうと議論を

してきましたけれども、その時は学生の実態はどうだ、我々はどちらの方向に向いているんだということをきちんと情報公開、同じ情報を持てば、それほど鋭い対立は生じないということを、我々は経験的に学んでいます。したがって大学運営を考える場合に、各学部、中高の先生、APUの先生、それから学生さんが同じ情報を持つということが一番大切であり、そしてそれぞれの考えていることを戦い合わせて違うところは、意見が違うということを担保しながら、一致できるところについては、一步一步前進するというのが大学の管理運営の民主的なあり方ではないかなと思っています。

市川 それでは、今の質問と関連するんですが、2点目の御質問をしたいと思います。学園のより民主的な管理・運営ということと関係するんですが、総長の役割をどう考えるかと。具体的には、総長のリーダーシップというものをどういうふうに考えるのかということについて候補の皆さんのお考えを聞きたいと思います。で、学園のより民主的な管理・運営と言った場合に、総長は、それぞれの部署で決定されたことをそうかというだけの象徴天皇というような存在なのか、あるいはもっとリーダーシップを発揮すべきなのか。あるいは総長が発揮すべきリーダーシップとはどのようなものなのかという点について、各候補の皆さんのお考えを聞きたいと思います。

中田 それでは引き続きになりますが、坂根候補からお願いできますでしょうか。

坂根 非常に難しい話でして、リーダーシップは何かという御質問だと思います。私は先ほども申し上げましたように、学部や付属校、APUの各校はそれぞれの現場を大事にして方針を持つべきだという風に言いました。そういう趣旨からしますと、かなり連邦制に近いような意識を持っております。ただ、リーダーシップと言いますと、上からこうしたいからみなさん協力してくださいというのでは、多分ないだろうと。と言って、みなさんが提案されるままのことをアクセプトして、それで行きましょうというのでは、多分ないだろうと思っています。ちょうどその中間かもしれないし、もっと大学として高いビジョンを持って、たとえば立命館大学を国際的なレベルの研究・教育の場にしようというようなビジョンを示すこと、そしてみなさんと一緒に議論を戦い合わせて、そういう大学にするにはどういうステップを踏めばいいのか、どういう環境整備が必要かということ語り合うのがリーダーシップではないかなと思います。

中田 ありがとうございます。続きまして、川口候補、お願いします。

川口 はい。私は所信表明の文章の中に、この選挙公報の1号でしょうか。総長の役割ということを書かせていただきました。私は4年間、総長をやってしまして総長が何をすべきかということを考えました。二つに大きくわけようと、一つは内部的な、これがリーダ

ーシップということと関わるんですが、リーダーシップを発揮する基本的条件は、私は理解だと思っています。それぞれの多様な構成、構成員、あるいは多様な学部、研究科、学校、それぞれがどういう事態にあって、何を要求しているのか、その要求の根拠は一体何なのか、それがどういう方向に行くのかということを引きちんと理解しなくてははいけない。立命館は非常に多様であります。この多様なそれぞれのところをきちんと理解するということが総長としてまず第一に求められる。理解するだけであって、その理解したことを互いに示し合う、つまり相互の理解を進める役割を持つというのが非常に大事な点。そこを通じて、立命館は非常に多様だけれども、ひとつの学園として、ひとつの学ぶコミュニティとして、まとまっていく、その機能を果たすのは総長だと思います。その上に立って、学園全体がお互いを理解することによって一つの方向への発展が可能になるだろうなと思います。

もうひとつは対外的な役割です。総長は、学園を代表して社会に色んな発信をしなければなりません。同時に社会がどう動いていて、社会が何を立命館に期待しているということをいち早くキャッチして、最前線に立っているわけですから、いち早く情報が入ります。それをきちんと学内に伝えていく。学内でそれぞれの人がそれぞれの要求を持っているけれども、それは一体、社会全体の中でどういう位置にあるか、どういう風に社会から見られているかということを引きちんと検証していかなければならないと思います。その役割をするのが私は総長だろうなと、総長のリーダーシップなんだろうと思います。ひょっとしたら我々の要求はひとり合点かもしれない。どうすれば私たちの要求が社会的な理解・賛同を得られるのか、そこを常に内部に対して発信してあげないといけないと思います。そしてまた、私たちの要求が社会にとって、社会の進歩にとって、あるいは国民の願いに合っているということをしっかりと我々が確信を持つことが、一層、学園のみなさんの努力、発展の方向に確信を持たせることになるだろうと思っていまして、そういうところに私は総長のリーダーシップということを考えています。

中田 ありがとうございます。最後に谷口候補、お願いします。

谷口 なかなか難しい課題なんですが、 の課題で私が申し上げたことですね、総長たるものは信頼を得なければならない、信頼を獲得する人物であるということが非常に大事であると思います。その上で、やはり先ほども申しています通り、大学を取り巻く、大学というのは孤立で存在しているわけではありません。要するに社会との接点、日本の中での社会との接点、あるいは世界の中での社会との接点の中で私どもは生かされているということを十分に認識する必要があると思います。私どもの大学は、付属校、小学校、中学校、高校、APU とそれから日本の各地から多様な学生が集まっていますし、海外から来ております。この状況の中で、議論を戦わせるということは非常に大事な点だと思います。理解を深める上で非常に大事な点だと思いますが、必ずしも私は一致が得られない場合が

多々あるのではないかと思います。非常に難しい時代に私どもは生きておりますので、それぞれ多様な意見があってしかるべきだと思います。その時に、要するに総長のリーダーシップが問われるという風に思います。要するに総長は、やはりその日本とか世界の中で進むべき大学のあり方ということを高次元で、多様な議論の中からくみ取って、立命館大学の進むべき方向を指し示す力強いリーダーシップが私は必要ではないだろうかという具合に思っています。それを担保するのが信頼ということであろうかと思えます。それで様々な、世の中は非常に速いスピードで展開しています。要するに今日は明日ではないという具合に早いスピードで展開している中で、私はスピードが要求されると思います。そういう中での適確な判断を持つ人が私は総長に相応しいのではないかと思います。

市川 三番目はですね、今、先ほどの所信表明の中にも出てきたりしていましたが、今立命館、特に立命館大学において、もっとも政策的な課題として議論されているキャンパス問題なんですが、ただ私の質問は、たとえば茨木キャンパスに移るのが適切かどうかとかそういうことではなくて、キャンパス問題を解決するにあたって、総長選というものがどういう意味を持つのかということについて、それぞれのお考えをお聞きしたいと思います。候補者の方の中には、所信表明の中でキャンパス問題を総長選の焦点にすべきじゃないと。要するにかつての郵政選挙のような単一の争点で是非を争うようなものにはすべきじゃないというお考えでしょうが、その点も含めましてこのキャンパス問題の解決にとって総長選はどのような意味を持つのか。それと関わりますけれども、このキャンパス問題を解決する、決定するにあたって、決め手と言いますか、決め時、決め手、あるいは決める時期はどういう風に考えるのかと。先ほど飯田候補のビデオの中にもありましたように、これだけの大きな立命館の中において全員の合意はあり得ないということで、どこかの何らかの決断がどの問題についてもされるわけですが、そうするとキャンパス問題についてもどこかで決断をするということになるだろうと。その決め時は、いつかと。それに、結局そういうことに、この総長選の影響があるのかどうかですね。それ次第では、単一の争点の郵政選挙にするなどと言っても無理だという風に思えます。ですから、そういう点で、繰り返しますが、このキャンパス問題の解決にとって総長選はどのような意義を持っているのかということについて、各候補の方々の御意見を伺いたいと思います。

中田 それでは、今度は川口候補、いかがでしょうか。

川口 私は、この問題は現職の総長として関わっておりますので、なかなか候補者としてどうかと言われると困るところがあります。基本的には、飯田先生が仰いましたように総長選挙ということと茨木キャンパスをどうするかということは関わりはないと思っています。それは、ひとつには総長選挙というものの性格が、これは何度も議論しましたが、推薦制度でありまして、政策を掲げて立候補するというものではありません。総長の人格や

から見識やら学園のビジョンを問うということが総長選挙の趣旨でありまして、個々の政策・判断を掲げて、立候補するということは基本的に性格が異なると思っていますので、基本的にはそう考えております。ただ、今度の総長選挙というのは学園の将来についての議論する場として非常に大事でありますので、先ほど私が申し上げました通り、キャンパス創造ということが持っている意味、今学園が抱えている課題を解決して、学園のさらなる発展を考えていく上でキャンパス創造というものについていろんな角度から議論を深め、合意を作っていくという意味では非常に重要な機会であるという風に考えております。そういう意味で先ほども私は触れさせていただいたし、色んなところでこの問題の重要性については、訴えさせて頂きました。そういう風に今度の総長選挙は関わってくるなというように考えております。

中田 ありがとうございます。続きまして、谷口候補、お願いできますか。

谷口 はい。私も期せずして推薦されてしまったわけですが、このキャンパス問題そのものを私は争点にして議論するにはふさわしくないという風に考えています。その上で、現在立命館が抱えている問題と、やはり新キャンパス問題はリンクしている点もありますので、その点に関して、私の考え方を申し述べたいと思っています。私は、最初、所信表明の中で質の高い教育・研究をする必要があるという具合に申し述べました。これはただ、そうする必要があるというだけでは実現をするわけではありません。すなわち、人的な手当てであるとか、それから物理的な学ぶ、あるいは研究をする環境を整備しない限り、これは絵に描いた餅となってしまいます。私は衣笠の近くに住んでいるわけですが、衣笠キャンパスの状況はつぶさに毎日、そこから BKC に通っていますので、状況はつぶさに見て知っております。自転車の混雑している状況であるとか、学生さんの食堂の状況であるとか、建物が、私は理工学部は元々向こうにいたわけですよ、ずっと長く。その建物が改修して現在使われています。私どもがいた化学は国際関係学部で非常にきれいになっているわけですが、建物そのものは非常に古いんです。見ますと、よくあんな建物がよくまだ建っているなと正直言って思うところもあります。そういう意味で、これをだから、このままにしておいていいのだろうか、それで教育・研究の質が担保できるのだろうかということを思った時に、やはり何らかの新しいキャンパスの展開は私は必要ではないかと思えます。みなさんは、学生さんも含めて大変、狭隘化した状況の中で毎日学び、研究しておられるという具合に思っています。このことは私は R2020 の中で全期間の過程の中で着手すると、全部解決するというのはなかなか時間がかかりますけれども、着手するということが是非必要ではないか。そのために新しいキャンパスを考えるということが必須でございます。BKC は、私ども理工学部は BKC に行きました。行った時はなんと広いところだと思ひまして、それが現在の状況では食堂は混雑する、研究室はないという非常に逆に言えば、衣笠ほどではないんですが、教育・研究の状況は非常に厳しいものがあります。私

は学部長をしておりますが、日々そういう問題について早く解決してほしいという声も上がっています。そういう意味で教育・研究の質を一層高度化して、世界に抗して展開していくためには、私はこの R2020 で是非とも新しいキャンパスの展開は必須ではないかという具合に考えています。以上です。

中田 ありがとうございます。坂根候補、いかがでしょうか。

坂根 はい。衣笠キャンパスは非常に狭隘化して何とかしなければいけないということは私も十分に認識しております。それと先ほど総長としてのリーダーシップのお話をさせていただきましたが、総長というのは大学の向かう方向を夢を持って語るべきではないかなと思います。そういう趣旨からしますと、茨木キャンパスの取得は決定的に運命づけるようなある種の展開であると思っています。したがって、総長選挙というのは個別の課題について論争して総長選挙をするべきではないと思っていますが、そういう風な立命館の将来像を決定的に決めるような事態がいま議論されている中で、総長選挙が行われるということは、これは総長選挙のひとつの論題にならざるを得ない。本当はしたくはないんですが、ならざるを得ないというのが私の考えであります。では、坂根はどう考えているかというご質問ですが、私は常任理事会でかなり議論をさせていただいておりますが、やはり茨木キャンパスは、軽々に判断すべきではないという風に考えております。これは、明確に申し上げておきたいと思います。その理由は、先ほどから現場主義というえらく泥臭い話をさせていただいておりますが、どうしても茨木新キャンパスとみなさんが実際に現場で教育と研究をしておられるところが、動線というか、うまく頭の中でつながらないんですね。これが本当に各学部や付属校等々の教学改善につながるということであれば、私はもろ手を挙げて賛成していると思います。しかし、その脈絡が明確でない以上、非常に大きな投資をすべきではないという風に考えております。以上です。

市川 それでは、時間もありますので、最後の質問にさせていただきますけれども、今度は教学の改善にかかわる点につきましてお伺いしたいと思います。具体的には ST 比の改善という、どなたもどの候補者の方も仰っておられた点なんです。この ST 比を改善するというのは非常に望ましい話で、反対する人はあまりいないと思うんですが、問題はこれにはそれなりに課題といたしますか、持っている重みがある話で、実際にどのようにしたら、この ST 比を改善できるのかを真剣に考える必要があるような、重要な課題だと思います。そこで、ST 比の改善につきまして、それを実現するための課題ですね。解決しなければならない課題はどこにあるとお考えなのか。それを踏まえて、ST 比の改善をどのように進めるといって総長になられた暁にはリーダーシップを発揮されるのかということをお伺いしたいということを、私からの最後の質問とさせていただきたいと思います。



中田 それでは谷口候補いかがでしょうか。

谷口 はい。ST比というのは Student と Teacher の略でしょうか。この要するに教員一人当たりの学生という、私立大学が抱える宿命的な課題であるように思います。かつては、大講義というのがありました。それをどのように解決していくのか。そこにすべてお金を投入すればいいのかというものではないように私は思っています。

ひとは、私は立命館は 94 年、BKC に展開をいたしまして、随分、改革の立命館ということで進んできたように思います。何でも改革だと、改革はなんでもいいんだということが進んできたように思うんですね。そういうことの矛盾というか、そのことがカリキュラム等々に反映しているのではないかと思います。大学に要する単位は 124 単位でございますが、理系の場合は必要上もっと多くということもあるんでしょうが、非常にカリキュラム構造が複雑化している。このことがひとは、教室が取りにくい、あるいは学生規模に対応した教育ができない。非常に大きな教室で数名で講義をしているということも教室事情上あります。僕はまず、本当にその学部にとって何が重要なのかということを中心に立ち返って考える必要があるんじゃないか。これもいい、あれもいいということじゃなくて、これはどうしても外せないというようなことを通して、やはりカリキュラムを精選する必要があるのではないかと思います。その中で、たとえば私が見てみますと、1名や2名の講義もあるんですね、大学院も含めて。だから、もう少し、教育、大学院教育、あるいは学部教育にとって何が必要かということをもう一度、原点に立ち返って各学部が考える必要があるんじゃないかと。その中で、カリキュラムをスリムにして、本当のエッセンスを学ばせるという教育姿勢の中で、私はひとつの ST 比の改善というのが図れるというふうに思います。

それから、付属高校にとっても ST 比の改善というのは、非常に重要な課題だろうと思います。これは、ST 比ですから、先生をどのように雇用するかという雇用形態にも関わっているような気がします。先生は、教える側は、若い先生から年寄りの先生まで色々おられます。最近、私のように定年になっても元気な先生方がたくさんおられるわけですね。力を持って余してどうしようかなという、タダでもいいから教えにいきたいという、実はそういう方もたくさんいらっしゃるわけですね。ですから、私は、こういういわゆる社会、大学は先ほども申しましたように、大学も付属もそうなんですが、社会の中で生かされているという感覚が非常に大事だと思います。有効な資源はどんどん大学、あるいは付属校に取り入れて行く。その中で ST 比の改善ということもあるかと思います。年寄りはいくなくないというんじゃないかと、やはり年寄りにはそれなりの長い教育経験があります。研究では少しボケても、教育力では誰もかなわないということもあるわけですから、もう少しやはり、社会的な力を借りて、大学として ST 比の改善に取り組む必要があると思っています。

中田 ありがとうございます。では、坂根候補お願いできますでしょうか。

坂根 ST 比の改革ですが、一般的にはもちろん ST 比が良くなることについては、賛成であります。ただし、これは各学部や高中の教学の中身と関わった ST 比の改革でないといけないという風に思っています。したがって各学部や高中で、あるいは小学校で一体何が ST 比上の問題なのか分析する必要があります。多分、大きく分けて二つあるのではないかなと思っています。ひとつは絶対的な ST 比が立命館が悪いのかどうか。そういう結論が出るのであれば、ST 比を変える。しかし、一般的には ST 比は、他大学の条件とほぼコンパラであるとは思っていませんが、こういうふうな教学改革をするためにこのような ST 比改革が必要であるという、分析的な教学の中身と関わった、ST 比の改善でなければいけないと思っています。ですから、ただ単に数字だけで 34 対 1 がいいのか、文社系では 58 か 59 だと思いますが、これを 55 にするのがいいのか、というようなことではあまり良くなって、やはり各学部の教学実態や学生実態のどこをどう改善するために、こういう ST 比の改善が必要であるというようなところに収れんして、そこに ST 比の改善を役立てるということにしなければ教学改革には結びつかないという風に思っていますので、そういう方向で議論をしたいと思っています。以上です。

中田 最後に川口候補、お願いします。

川口 ST 比の改善は、この中期計画の大きな柱のひとつであります。その方向性は今、お二方が言われたのと全く同じでありまして、教学改革の大きな柱としての ST 比の改善ということであります。私は先ほど申し上げましたように、学生の学びという観点から見て、これはどうなんだろう、どういう教員をどこにどのように増やしていく必要があるのかという議論がとても大事だろうと思います。現在、常任理事会の教学のところでは、教学改革のガイドラインというものを各学部にお示して、各学部の教学改革と連動の中で ST 比を決めて行こうとしています。その中で例えば小集団で規模をどうするか、こういう小集団教育をするためには、このぐらいの規模の学生数にしなければならない。そのためには、どれだけの教員がいるかということであったりとか、あるいは文学部がやっている卒論必修、二名の教員が諮問をするようなそういう必修性の卒業論文を卒業時の学力保証としてやるということを学部の教学改革として決めるのであれば、一体何人の教員が必要であるのかとか、こういうまさしく教学の中身と関わった議論が現在展開されてきています。これを何とか年内、あるいは年度内に詰め切って、具体的な教学教員整備計画に落とし込んでいくというスケジュールで現在進めておりますので、これはこれとして、是非進めていきたいし、今お話にありましたように、各学部の教学改革と連動した形でこれを具体化したいと思います。ただ、今、選管委員長の御質問の趣旨は、それはいいけど、本当に可能な、どうすればこれができるんだろうかということだろうと思いますが、今、新中期計画の中で議論しておりますのは、当然教員を増員すればそれだけ経費がかかるわけです。

教員の人件費もいれば、職員も研究室もいるわけです。そういう条件をクリアしようとすると、相当な財政負担が重くなるわけです。そんな財政の負担が可能なのか、学費はどうするのかという議論も当然出てまいります。今、私たちは、常任理事会としては、学費を上げるという前提なしで、実現できる方策がないものかと真剣に議論をしております。その一つの考え方が新しい財政運用の在り方、従来とは違う財政運用のあり方をすることによって、そうした原資を生み出して、ST比の改善もしていきたいし、新しいキャンパス創造も可能にしていきたいということで、現在議論しているということでもあります。ということで、私は現実可能なST比の改善、そして教学改革に役立つST比の改革を何としても中期計画の中で具体化したいという風に考えております。以上です。

中田 ありがとうございます。そうしましたら、委員長からの質問は、以上ということにいたしまして、引き続きまして朱雀の会場にお集まりいただいた皆さまから、この三名の候補者に対しまして、質問がございましたら、伺いたいと思います。なお、質問は各候補者の公平性ということを考慮いたしまして、なるべく候補者皆さま、全員に対する質問とさせていただきますようお願いしたいと思います。また、これも大変、かさねがさねで恐縮で申し訳ありませんが、限られた時間でございます。ですので、おひとりでも多くの方に御質問いただくために、質問される方は、所属とお名前を仰っていただいて、質問事項を簡潔にまとめて頂いた上で、御発言いただきますようお願い申し上げます。よろしく申し上げます。総長候補者のお三方におかれましても、回答はなるべく簡潔に、できれば1分ぐらいにまとめていただくと、大変ありがたいかと思っております。早速ではございますが、どなたか御質問のある方、おられますでしょうか。挙手をお願いします。

稲葉 私は立命館大学の経済学部にて勤めております稲葉と申します。よろしくお願い致します。私、この大学に赴任しまして25年が経ちます。今日は、この後期のセメスターでたまたま演習科目を学部の4年、そして大学院の2年、そして博士課程の7学年、連続して担当することになりまして、そういうこともあってそれと過去の経験から私が考えている事柄について2点質問させていただきたいと思っております。第一点は、先ほども話しにしましたが、学生諸君、大学院生諸君、高等学校生のみなさんがやはり立命館に来て良かったという気持ちになってもらう、これが一番私たちとしては重要なことだと思っております。その中でやはりそういう気持ちになるということは、それぞれに修了したところにしかるべき、色んな身につけることがある。それは何かというと、物事をじっくり考えて、粘り強く考えていく力ではないかと私は考えています。そのようなことを身につける力というのは、私が現場が見ている限りでは、その環境はハード面でもソフト面でも必ずしも十分ではなくて、それが悪化しているように感じております。そのために私はこのような粘り強い力というのを基礎学力に並んで基礎体力、学習の基礎体力と呼びたいと思っておりますが、その基礎体力をどのようにつけていくかが今問われています。その点で学生実態を踏まえて、各候

補者の方はどのように考えておられるのか、また改善すべき点は何かということについてお伺い出来ればと思います。第二点は、国際化の問題と関わっております。私は大学院の今 5 科目を持ってまして、それは全部留学生の科目です。そういうこともありまして、留学生の支援あるいは学習ということについて、どうするか、私は非常に色々と考えておりますが、やはりその中で支援という点ではハード面、ソフト面で不十分な点がたくさんあると指摘せざるを得ません。たとえばですね、私が持っている、指導している 4 人の留学生の中の一人は、出産を間近に控えています。それは本人の責任かもしれませんが、そういう形で出産をする院生にもきちんと修了して立命館を巣だって良かったという気持ちになってほしいわけですが、そのサポートが不足していると思います。私は実際にその支援とか学習面では BKC 国際課のスタッフの方々とか、あるいは事務スタッフに支えられているんな形でやっていて、これが教職協働がものすごく重要だと感じています。しかし、教職協働ということは継続してやって初めて意味があるわけですが、残念ながらこの間、人事異動とか色んなことで非常に色んなブツブツと切られたことがありまして、私は泣かされたことがあります。そういう意味で、これは事務職の問題かもしれませんが、これは私は教学上の問題だと思っています。それからもう一点は・・・。

中田 2点と仰いませんでしたでしょうか。お時間があれば、お願いします。学習の基礎体力ということと、留学生の支援、教職協働ということで、川口候補からお願いできますでしょうか。

川口 とても大事な御指摘をありがとうございます。私は今、学生の学びのあり方を大きく支援する、そういうことが重要だなと思っています。私は教えるということじゃなくて、学びというのを強調するのは、今まさに稲葉さんが仰られたことでありまして、自分で考えて、自分で勉強して、自分で文献を調べて学ぶという、この習慣、あるいは方法を初年次のところでどうしっかり身につけて行くかということが大学の初年次教育あるいは大学教育にとって極めて重要な課題であると思います。そこからそのひとつは申し上げました基礎演習のサイズの問題、あるいはピアエデュケーションですね、オリターをはじめとする学生諸君の学び合いをお互い支援する仕組み。お互いに学び合いをするための場の提供、空間の提供ですね。これは、ラーニングコモンズとか色んな形で今、言われていることと関わります。ですから、今、学生諸君が自分で学んでいく、そういう学習主体となっていくための教育の仕組みとしての基礎演習をはじめとするいくつかの、これは課外の重要な場面になると思いますが、そういう仕組みとそれを指導する教員、これは数の問題だけじゃなくて、これは前回の全学協でも指摘されました通り FD の問題が非常に大事で、どう教員が学生諸君を指導、あるいは援助できるかという FD の課題がある。そして、それを支える空間的、あるいは設備的なハード的な条件の問題、これを一体となって今整理しなければいけない。これを次の中期計画でも具体化していきたいという点が今の第一点です。第

二点は、留学生支援は、これは本当にこれからグローバル 30 で多くの留学生を迎えて行くという時に、私たちがこれをいかに系統的に、あるいはハード的にも対応できるかというのは非常に重要な課題であります。これも、ひとつは教員・職員の拡充ということがあります。とりわけこれができる教員体制、そしてそれを受け止める職員体制、それぞれ教員、職員の増員計画を今、具体化してきております。すでに増員を決めて、入っているところもありますが、さらにこれを拡充していく。ハード的には、私がとても大事だと思ったのは、留学生寮の建設です。国際寮を BKC と衣笠に建設しようということで用地は既に手配しました。これは、いよいよ建設の段階に入っていて、BKC はいよいよ建設プロジェクトがまとまってまいりますし、さらに衣笠も進んできております。これは私は単に留学生のレベルだけじゃなくて、日本人学生が共に学ぶ新しい形の教育寮として、国際的な教育寮として、是非完成させたいという風に思っています。以上です。

中田 はい。ありがとうございます。続きまして、坂根候補、お願いします。

坂根 まず、一点目ですが、考えるための知的基礎体力がないということについては、全く同感であります。先ほど冒頭に理工学部の学生の実態調査のお話をしましたが、実態は、少し詳細に調べたお話をさせていただきましたが、全く同感です。それでこの点につきましても理工学部のことばかり申し上げて恐縮なんです、小集団でこういう知的体力を養成できるのかという、命題についてかなり議論をしました。結論はですね、小集団授業で出来る面もあるが、それだけでは不十分であろうというのが私が持っている印象です。というのは、やはり学生さんを集団という風に捉えて、その集団を教育しようということについて、一定の限界があるというのが今の私の考え方で、したがって学生さん一人ひとりに見合ったような教育システムをいかに作り上げるか、それを我々は一回生の接続教育というカテゴリーでやりたいという風に思っておりますが、というところが非常に大きな課題ではないかなと思います。したがって個々の学生さんの到達度や思いに合ったような、たとえば物理駆け込み寺とか、数学相談会、実は物理駆け込み寺にはこの前期で 1,000 人の理工学部の学生さんが集まって色んな相談をしています。というようなシステムを今は理系、私は理工学部長ですので理系で考えていますが、社系で大規模大学でできるのかどうかということをおなさんと一度議論してみたいという風に思っています。二つ目の国際化の話は、非常に大事な視点で、私の研究室にも今 5 人ぐらい留学生の大学院生がいますけれども、色んな場面で身につまされる思いです。これもあまり立命館がソフトのサポート部分にあまりお金を使ってこなかったのが一つの原因ではないかなと思っています。それと、国際化、そういうところを充実すべきではないかなと思っています。それから、国際化というと留学生を何名取るかというようなところにいつも議論が集中するんですが、それだけでいいんだろうかという疑問を私は持っています。立命館で学んでいる日本人の学生さんが国際化しないといけない。どんどん海外に行ってほしい。語学の基礎学力も付

けてほしいという風に思っていますので、そのためには一定数の留学生が必要ですが、やはり立命館の国際化の基軸は、今立命館で学んでおられる学生さんをどういうふうに国際舞台で働けるか、どういう舞台で活躍できるかということを基軸に考えて行く必要があると考えています。

中田 続きまして、谷口候補お願いします。

谷口 はい。立命館で学んで良かった、基礎体力どうだという御質問ですが、私は、教育は頭だけではできないという信念を持っています。要するに五感をすべて使うということだろうと思います。そういう教育の仕方を大学でしないと、あまりにも高校までは頭だけの訓練に終わっているのではないかなと。大学に入ってやはり全身を使って学ぶという仕組みづくりが私は必要ではないかなと思います。それを具体化するにはどうしたらいいかというと、それは正課だけでは駄目だということです。なんぼ学力があっても駄目だと。学力もなければ駄目なんです、学力だけではこの世は通じませんよということです。そう意味では、立命館で非常に活発に展開しているのは、要するに課外の自主活動ですね、課外活動です。要するに学力、正課ではその専門的な知識を身につけると、それをどういう風に体験的に合わせていくのかというのを課外活動、あるいは自主活動を通して学ばなければならないという具合に思っています。その中でリーダーシップであるとか、社会的な倫理観であるとか、一般的な教養であるとか、正課では学べない人間として非常に大事なものが課外活動、自主活動だろうと思っています。スポーツ活動もその中にあります。要するに正課と課外というのが、立命館のいわゆる学力というか人間力を育てていく唯一の、力強い方策だと思っていますので、両方、両面にわたって力を入れていく必要があるだろうと思います。とりわけ、課外自主活動については、教学条件、あるいは施設面で非常に厳しい状況があります。これについては速やかに改善する必要があると思いますし、先生方の指導につきましても、やはり五時限目以降は授業を入れない。先生方が心おきなく学生の課外活動の指導ができる、それには先ほど申しましたように徹底的にカリキュラムの精選をしてこの学部で何を学ぶ必要があるのかということを各学部で取り組んでいただきたい。そのことがやはり立命館の体力、学力を付ける体力を含めた道だろうと思っています。

それから国際化の留学生の支援ということで、国は三十万人計画というのを提案しました。これはやみくもに提案しているわけではなくて、来るべき時代に、2020年以降に18歳人口は約三十万人減るんですね。この中でやはり日本として高等教育は極めて不安定になるということは、日本の発展にとって極めて難しい問題、要するに解決しなければならない問題だろうということで、要するに留学生でそれを補てんをすると、全てそれだけの意味じゃないですが、そういう意味もあるということです。それで、留学生はただ迎え入れるだけじゃなくて、送り出し三十万人ということも唱えています。要するに相互に学ぶ

ということです。日本人学生は、ご存知だと思いますが、外に出て行きたがらない。非常に内向きな志向が非常に強くなっています。このことは、やはり立命館の学生も含めて海外で学ばせる、海外から迎え入れるということは、日本の高等教育にとってきわめて重要な課題だろうと思いますし、立命館が今後推進しなければならない課題だろうと思っています。だから、ソフト面では相互に行けるということの仕組みづくり、あるいはデュアルディグリーだとかそういうことも含めて海外で学ばせる経験は非常に重要だという具合に考えています。

それから、ハード面なんですけど、幸いそれぞれのキャンパスに国際寮ができます。それで一番大事なことは、留学生とともに学ぶという姿勢が非常に大事だと思います。だから、そういう意味で留学生だけが孤立するんじゃなくて、留学生とともに学ぶ、共に生活するという仕組みをそれぞれのキャンパスで是非実現をしていただきたいと思っています。それから留学生はなぜ日本を目指してくるのかということの一つに、大学院であれば学位を取ることが最大の課題なんですね。このために全教職員を含めて学位をきちんと取れる仕組み、サポートする仕組みが必要だと思いますし、最近の学生は是非日本の企業で就職したいという希望を叶える留学生がたくさんございます。そういう意味で、キャリアセンターとも協力して日本の企業にきちんと就職させる仕組み、そのことが日本の発展にとって大事だろうと思っています。今、優秀な高度職業人が今現在、現場で不足をしています。そのことが日本の発展にとって極めて厳しい状況でございますので、是非優秀な留学生を日本の企業に就職させて、日本を元気にしていただくということが必要ではないかなと思います。以上です。

中田 はい。続きまして質問をお受けしたいと思いますが、時間もございますし、あともう一点、沢山の方に御質問いただきたいので、私も教員の一人として分かりますが質問はひとつまず、そして中身を絞って端的に頂ければと思います。それからお答えいただく候補者の方々も少し御配慮いただけると助かります。それでは、他の質問を受け付けます。どうぞ。

齋藤 経済学部で齋藤と申します。私は一時金訴訟の原告団の一人として是非この問題を伺いたいと思います。先ほどの三候補のお話の中で信頼回復ということが期せずして、キーワードになっていますが、私もそれを願っているその一人として、立命館の大学における不信頼の状況を作り出してきた大きな要因の一つが、教職員の一時金の05年から三年間にわたるカットであったということは、私はまぎれもない事実かと思っています。司会者の要請もございますので、質問にもお答え頂いたその内容についても触れたくあるんですが、そういったこともすべて捨象しまして、現在二回目の非常にお忙しいところ申し訳ないんですが、私どもからの立場からの質問をさせていただいております。それにも是非お答えいただきたいとお願いした上で、ここでは端的に一つあるいは二つお願いをしたい。ひと

つは一時金カット政策というのは今日から振り返ってみて、政策的に間違っていたということをお認めになることがこの問題を前進的に解決していく出発点であると、私どもは思います。それからもう一つは労働組合の交渉の中で起こったことでございます。労働組合の交渉の中で起こったことでございますけれども、交渉が極めて不正常的な形で終わっている、そのことについてどういう風に思っておられるか。これは、関連する問題でもありますので、是非その2点についてお答えいただければと思います。

中田 はい。それでは、坂根候補からお願いできますでしょうか。

坂根 非常にシリアスな問題です。私も今、すべからくも理事でございますので、どちらかという経営サイドでありまして、今なお係争中ということですので、それを踏まえた回答ということに御理解いただければと思います。一点目でございますが、間違っていたか間違っていなかったかということですが、ちょっと私はそれに回答することは難しい、立场上難しいと思っています。ただ言えることは、学内の不信のきっかけになったことの一つであるということは申し上げておきたいと思っています。それと、労働組合の交渉が不正常であったかということについては、そういう面もあったのではないかなと思っています。非常に簡単ではございますが、私の考えです。

中田 谷口候補、お願いできますか。

谷口 私は第一次の質問状に御回答申し上げましたので、それ以上のことは申し上げることはないと思いますが、その回答の内容は、要するに現在の和解ということが言われていますので、常任理事会も和解に向けて、努力しているという最中でございます。私はそれを尊重したいと思っています。不幸な事態であったということは、仰るんだからそうなんだろうが、私は先ほど所信表明でも申し上げました通り、この総長選挙というのは、まさに公正性で実施している選挙でございます。私はこのことを通して学園の結束を図りたいと考えているんです。この総長選挙を通して、信頼回復を図りたいと考えておりますので、私がこのみなさんが多分、それに賛同していただければ幸いかと思います。以上です。

中田 川口候補、お願いします。

川口 私は現職の総長でありますし、そういう意味ではお答えしにくい課題であると思いますが、私は基本的には昨年の12月に理事長が出しました、色んな問題があるけれども思い切って和解を進めたいということが基本だと思っています。それには、従来の枠を破った上での提案を含めてこれをやっていきたいということで、いくつかの提案も差し上げていると思います。現在、和解協議ということでもありますし、我々としてはそういう理事



会、常任理事会の枠を超えたいいくつかの提案をさせていただいているということですので、是非、胸襟を開いて一步、進んでいただきたい。先ほど言われたことは重々承知しておりますが、なぜそれを理事会がそれにたって言えないかということは説明してきたと思います。私たちは、今の全学の構成員の信頼回復を考えた時に一番いい道は何なんだろうかということで、是非話し合いを続けて行きたいと考えております。御指摘の通り、一時金訴訟を一日も早く解決したいという思いは持っておりますので、そういう意味でのお話し合いは続けさせて頂きたいと思っております。

中田 続きまして質問を受け付けたいと思います。

折原 産業社会学部一回生の折原です。大学生活を送るにあたって、学ぶことや課外活動をする、海外留学をすることは大変重要なことだとは思いますが、今多くの学生が学費に苦しみ、勉強したくても学費を払うためにアルバイトを3つ掛け持ちする学生、留学したくてもできない、アルバイトをしなければできない状況が学生に多くありますが、その深刻な学費の実態についてどのようなお考えをお持ちでしょうか。

中田 はい。谷口候補からお願いできますか。

谷口 昨今の非常に厳しい経済状況のもとで、学生の経済状況も非常に厳しいと実感をしています。たとえば父母の要するに比較的少ない年収の父母からの層がここ近年増えてきているという実態がございます。一方、中間層と言いますか800万前後の年収のところは逆に減ってきている。その他のところはほとんど変わってきていないという状況にあるということは十分に認識しています。ご存知の通り、奨学金は育英と、経済的な困窮度でもって奨学金を支給しているというのがあるわけですが、私は少なくともその比率は変えていくべきだろうと。要するに経済的に困窮している学生の割合を高くして、そういう支給形態に変えていく必要があるのではないかと考えています。実際に困窮している学生も増えていきますので、その育英の部分を減らして、経済的な困窮度の学生に多く当たるように、また奨学金を採用、判断する時に経済指標を、どれだけ困っているかという指標があるんですが、色んな指標があるんですが、経済困窮度の割合を高くして、より多くの困っている学生に支援出来るような方策に切り替えていく必要があるのではないかと考えています。それからご存知かと思いますが、民主党政権下では全ての高校は無償化ということになっていますが、全ての学生に対して奨学金を増やしていこうという政策を取っています。非常に難しい経済の財政事情のもとで、要するに様々な形の奨学金をまんべんなく増やしていこうという、これは一遍にはできませんから、子供手当のように一度にはできませんから少しずつ増やしていくということが必要だと考えておられまして、私ども立命館大学の父母、教職員、学生も含めてそういう運動を加速して行く必要があるのではないかと。大

学だけの努力だけでなく、国の政策を後押ししていくような政策が是非とも必要ではないかと私は考えています。以上です。

川口 学費の問題は、私も非常に今緊迫してきていると思っています。私が総長になりましたすぐに全学協議会というのがありまして、その時私は大胆にこれまでの授業学費のアップ率を下げて、物価上昇率を反映させないという提案をさせていただいたという経過があります。そして、今年には物価上昇率の0.5%を適用しないということを常任理事会として決めさせて頂きました。それで来年度は授業料は値上げしなくて済むということになりました。これは来年度、きちんと今後の学費と、立命館の学園財政と、今ありました奨学金の問題と総合的に考えて、学生にとって本当に一番学びやすい、今の立命館の力量の中で一番学びやすい環境を作るにはどうしたらいいかということを真剣に議論していきたいという風に考えています。加えて、今ありましたように国からの学生への支援を思い切って上げるべきだろうと思っています。国の学生に対する授業料減免の予算は国立で200億円あります。それに対して私学は75%の学生を占めているにも関わらず、40億円しかないんです。こんな格差が今まかり通っているんです。そうではなくて、本当にすべての学生に平等に授業料減免をしてほしい、あるいは給付制奨学金を作してほしいと、これは不可能な要求ではないはずなんです。財源がないわけじゃないんです。今の国の文教政策が私学軽視になっているというところに来た問題なんです。そのために、私は事あるごとに文科省に申し上げているんですが、最近は賛同してくれる学長も増えてまいりまして、なんとかここ1年、概算要求、追加予算要求を通じて、一歩でも二歩でも前進していきたいと考えております。

中田 坂根候補、お願いします。

坂根 学費の件ですが、理工学部の執行部会議でも、教授会でですね、退学者や休学者が何名か毎年出ますが、経済的事情というのが多いので私も心を痛めているところです。それで学費は、教学条件や経済状況、あるいは立命館の財政状況も勘案して決まるということで、来年が全学協があって学費の改定を決める年ですが、私はかなり緊急度が高いという風に思っていて、もし可能であれば来年度の全学協を待たずに学費をどういう風に行けるかということについて議論の準備に入りたいという風に思っています。それが一点です。二点目はこの間立命館の奨学金制度は、先ほど谷口先生も言われましたが、育英、成績優秀者を奨励するという奨学金制度だったんですが、昨今の日本の経済状況を考えますと、これを大胆に経済援助という風に切り替える必要があるかと思っております。中期計画のところでも議論が出ていますけれども、これを具体化したいという風に思っています。三点目は公費助成であります。やはり世界的に見ても日本の授業料は極めて高いということがありますので、国連の条項を批准していないのは先進国では日本だけ、13号C

項でしたっけ。ということがありますので、先ほども川口先生がおっしゃられましたが抜本的な公費助成の運動に全学を上げて取り組みたいと思っています。以上です。

中田 ありがとうございます。次の質問どうぞ。

庄司 立命館学生部の庄司と申します。本日はありがとうございます。一点質問させていただきますが、私は学生部という部署に所属していますので、業務柄、課外活動に取り組む学生と多く接しています。彼らは立命館大学で申し上げますと、約半数以上ですね、の学生が課外活動に自主的に参加しているのですが、このスポーツ、文化、芸術等も含めまして課外自主活動の教育的な意味とですね、今後の方向性について候補者の皆さまの考えをお聞かせ願えればと思います。よろしくお願いします。

中田 それでは川口候補からお願いします。

川口 私は先ほども申し上げました通り、今は大学は大きく学ぶ場へと転換しなければならないと考えます。学ぶということは学生の主体的な参加であります。そういう意味では自ら学ぶ場であります課外はスポーツであれ、文化であれ学術であれ、非常に重要な場である。この課外と正課とをどう連動させるか、相乗効果を出すかということが私は今の課題ではないかと思っています。スポーツの分野でありましても、これをどのように組織、運営をしていくのか、あるいはどのように練習を組み立てていくのか、トレーニングしていくのか、戦略を立てるのか。これは大きく正課と関連しますし、またそこで自ら学んだ様々な学びの訓練された力が正課の場で生きてくるといふ風に私は考えています。そういう意味で、私は正課と課外を連動させ、そして相乗効果を上げるような課外と正課の関係性を是非作り上げていきたいし、そういう色んな具体的な事例をもっともっと上げて学部教授会でも議論していただきたいと思っています。そういう意味での学生部の活動にも期待していますし、私自身そういうものの色んな活動の先頭にも立っていきたいと思っています。それから、課外だからということで、どうしても二次的になりますが、そうではなくて場所の保障、財政の保障についても考えていきたいと思っています。

中田 谷口候補、いかがでしょう。

谷口 その点につきまして、私は先ほど申し上げたと思います。正課と課外は両輪だということです。正課は正課なりに重要なことなんですけど、課外活動で立命館学生が獲得している力にどのようなものがあるのかということ、自ら先頭に立って行動する、いわゆるリーダーシップを発揮するという。それと他人と協力しながら物事を進めるという力、社会活動に積極的に参加する態度という風にいわゆる社会に通ずる人間力というものが、必

要で、それを醸成しているということになりますし、そのことが正課に大きく帰ってくるということだろうと思いますので、先ほど申しました通り、人的な支援、ハード面な問題等々がありますので、そういう課題については早急に取り組む必要があると考えています。以上です。

中田 はい。ありがとうございます。坂根候補いかがでしょうか。

坂根 私も課外は正課と並んで重要なのではないかなと思っております。先ほどどなたかが、正課を通して知的体力という言葉を使われましたが、私が課外を通して人間力を養う必要があるのではないかなと思います。その中には、色々交渉力とか、人との付き合い方、ものの考え方等々あると思います。私自身も立命館の出身でございます、大学二年生の時にクラシックギター部に入っておりました。一年間だけでしたが、その中で先輩後輩の関係とか合宿とか、クラブのマネジメント等々を学びまして、随分厳しいなと思いつつも勉強した経験があります。それと現在、レスリング部の部長をしておまして、クラブの面倒を見ているということもありますので、是非とも正課と並んで課外活動に学生さんも取り組んでいただいて、人間力を多いに鍛えて頂きたいと思っています。

中田 ありがとうございます。次の質問を受け付けます。

小堀 法学部の小堀と申します。新キャンパス問題で議論ばかりしていてもいけない、いつか決断をしなければいけないということなんですが、大学にとって一番大事なのはいはり教学ですから、これを置き去りにして、決断するということはあり得ないと思いますし、収支についても十年後には赤字になるという話もありまして、こういうところも置き去りにして決めてはいけないと思うんですが、一方で切り離しても、そういう問題と切り離しても先に買うのが大事なんだという意見を責任ある方から教授会の文書で見たこともあります。こういうことについては是非をお聞きしたいと思います。切り離していいのかどうかです。

中田 はい。それでは坂根候補からいかがでしょうか。

坂根 先ほども意見表明した通りでして、新キャンパスについては教学の関係がきちんと整理されない限り、私は慎重であるべきだと思っています。ですから茨木キャンパスについては、現在のところ期限を切って判断をすべきではないという風な見解を持っています。理由は先ほど申し上げました通り、茨木新キャンパス確保と、教学、各学部の教学改善の見通しが十分でない中で判断するのは早計であると思っています。ただし、衣笠のキャンパスの狭隘化は十分に認識しておりますので、大学の近辺で可能な限り、山ノ内も含めて

ですね、再検討を含めて、衣笠キャンパスの狭隘化を解消すべく最大限の努力をすべきだろうと思っています。

中田 川口候補、いかがでしょう。

川口 はい。小堀さんの御指摘にあります教学について言えば、常任理事会として当然議論する予定をしております、そういう予定をしています。教学改革がどう可能かということ、茨木キャンパスにするにしろ、新キャンパス、私はキャンパス創造と申し上げましたが、キャンパス創造を考える上で最大のポイントであるということについては変わりありません。決して今の議論の流れ方は教学改革、学部、研究科の教育をどう発展させていくかということと無関係に進めているのではなくて、まさにそれを進めるためのキャンパス創造であると是非とも御理解いただきたいと思います。もうひとつ言われました財政のことにつきましては、これは完全な誤解でありまして、私たちは新しい財政運用のあり方の下で考えても、2010年は健全な財政を維持できるという風に判断をしております。以上です。

中田 谷口候補、お願いします。

谷口 新キャンパス問題については、私は先ほど発言した通りですが、基本的には教学を抜きにして、新キャンパスというのはあり得ない。教学は何なのかということは議論が分かれるところだと思いますが、先ほども何度も申しています通り、日本、世界を取り巻く環境というのは非常に厳しいという状況はやはり認識しておかなければならない。だから、大学というのは立命館がここにあるというのではなくて、社会との接点であるということも十分に考えて、その問題を教学の中に取り込む。たとえば、具体的には受験生の学力が減ってきて大変だという学部もあるわけですね。そういう問題についてどう答えていくのか。それは学部で当然お考えになるということですが、それぞれの学部がいわゆる新しい高等教育の流れの中でどういう具合にそれを取りこんで、新しく発展していこうという考え方が必要だろうと思いますし、その延長線上に私は新キャンパスがあると考えております。

中田 ありがとうございます。時間が来てはおりますが、一人でも多くの方の質問を受け付けたいと思いますので、簡潔に、手短にお願いします。

安田 私は国際日本文化研究センターの安田と申します。卒業生です。私は、ずっと立命館大学の卒業生であるということを引きつけてきたわけですが、卒業生として一言申し上げさせていただきたいと思います。それはですね、立命館大学を卒業したということによ

って私も大変苦労しました。東北大学、広島大学、そして今は日文研におるわけですが、そういう卒業生が立命館が素晴らしく立派になっているということに対して、私は本当に誇りに最近思っていますが、特にいいところは、京大や東大を出られた先生方が教授になっておられる。同志社大学はほとんどが同志社大学の卒業生になっておられるわけですが、立命館大学のいいところはオールハンドに優秀な先生だったらどこでも取ってくると、そこが立命の誇りだと思っていました。お二人が他の大学を出られて、お二人が立命の純粹の卒業生であるということですが、この三人の先生方にお聞きしたいんですが、今後立命を運営する時に、どういう人事をされていきたいのか、どういう教授を取って、今後、運営されていきたいのかをお聞かせ願えればと思います。

中田 ありがとうございます。谷口候補、お願いできますでしょうか。

谷口 私も立命館の大学院を 1975 年に卒業しました。それですと本当に立命館のそのものなんですが、今ご質問にあった通り、立命館は優秀な先生をあらゆるところから取ってくるということは、私は非常に優れていいところだと思いますけれども、一方で私は立命館の卒業生として、ちょっとさびしいような感じを受けているんです。やはり卒業生が立命館で奉職できる。そのためには力をつけないといけない。他流試合で力を付ける。そういう厳しい教育、研究者としての教育をしていただいた上で、やはりその幾分かは立命館の卒業生が教員になっているということは、おそらく在学生にとっても非常に誇りなんじゃないかなと思っています。いわゆる大学というのは研究者、教育者を作っていく立場にあるわけですから、全てが立命館の卒業生ということでは困ります。適当な卒業生がそれなりにすごい母校愛を持って、立命館のためなら身を投げ出してもいいと思えるぐらいの卒業生が教育現場に一定量いることが私は非常に重要なことだと思っています。その割合は、色々あると思いますが、そんな具合に人事政策としても有能な卒業生を是非送ってほしいと、先生方をお願いをしたい。その卒業生が立命館に帰ってくると、そして教育現場で教えるということも非常に重要だと私は考えております。以上です。

中田 坂根候補いかがでしょうか。

坂根 立命館の教員がすべて立命館出身であってはまずいと思いますし、また逆もまずいと思っています。私自身も立命館を 1972 年に学部を卒業しました。理工学部の現状を見ると、もう少し立命館出身の卒業生が教職に立命館で奉職してほしいと願っております。しかし、一面で理工学の研究や教育の現場は厳しい国際競争にさらされています。私は学部長になってから 3 年半ですが、教授会でこういうお願いの仕方をしています。立命館の先生を取ってくださいとは言えませんので、そういう風にしますと駄目なので、もし複数の志望者、教員になりたいという志望者がありまして、ほぼ同程度の学力、研究力、あるいは

は教育力があれば、できれば立命館の方を採用をしていただきたいという願いをこの間、ずっと三年間しておりました。その理由は、やはり優秀な学生さんを出さないと競合に勝って立命館の教員になれないと、立命館は研究者や教員を出せない大学なんだと外から見られるわけですね。そういうお話もしました。時々、ちょっと不規則発言になるかもしれませんが、立命館の人は残念ながら駄目でしたと言われると、それは先生方の教育の成果じゃないんですかというお話をいつもしています。ですから、これは卵と鶏の関係かもしれませんが、立命館の教育力を増やす中で、外との大学との競争力を持って、立命館の卒業生が競り勝って立命館に就職できるような大学にしたいと思っています。

中田 川口候補、お願いします。

川口 安田先生のような立派な方が本学の卒業生であることをわたしは誇りに思っています。ありがとうございます。教員の人事構成を政策として持つことを私は重要なことだと思っておりますけれども、実はまだ学園で議論されきっていません。本学の卒業生をどれぐらいの比率にするかということもポイントでありますし、あるいは女性教員の比率をどうするのか、あるいは外国人教員の比率をどうするのか。いずれも教員のひとつひとつの科目については一番優秀な人を取るといって一個一個やっていますよね。これが本当にいいのかどうかということを考えなければいけない時期にきている。とりわけ女性の教員の比率をどう考えるかということについては、かなりシビアな問題として私は考えていまして、これだけ女子学生が増えている中で、教員とのギャップがこれでいいのかという問題意識は常に持っています。加えて今ご質問のブリッド率というんですかね、純粹のブリッドをどうするのかという話ですが、これは私は結局は大学院政策だと思っています。大学院の中でどれだけ研究者を養成できるか、意識的に研究者を作っていくかということ。今、大学院を博士課程も含めて、単に個人指導のレベルではなくて集団として機関として研究力をつけていけるような仕組みを作っていくということが議論されています。この中でしっかりとした研究者を作っていく、あるいは外国の留学も含めて、組織的、意識的にしっかりとした教員を作っていくというのが我々の課題でありました。その中でおそらく立命館出身者が本学でも増えていくという道になるのではないかなと思っています。以上です。

中田 ありがとうございます。その他に御質問ありますか。

川口 広報課の川口と申します。よろしく申し上げます。私は職員になって五年になるんですが、立命館のすごくいいところに教職協働ということが当たり前みなさん口から出てきますし、馴染んでいると。新しい仕事にチャレンジしていく時には教職協働を存分に発揮すべきだと思うんですが、みなさんこの教職協働という風土に対してどのような可能

性をお感じになっておられますでしょうか。

中田 それでは、坂根候補からお願いします。

坂根 はい。教職協働についてお尋ねですが、私は教職協働は非常に大事な観点であると思っています。やはり教職協働の中身は教育や研究が中心に座っていないといけないという風には思っています。教員は、学生さんに一生懸命教えるということと、教育をするというようなことが大事だと思いますし、職員の方はそれを一緒にやるということです。ただし、立命館の教職協働のあり方については、若干それより進んでいるのではないかなと思っています。それを大事にしたいという風に思っています。それは、職員の方は単なる研究や教育のお手伝い役としては見ていないということではないかなと思っています。どういう風な教育をしたらいいのか、どういう風な研究をしたらいいのかという政策立案の段階から一緒に教員と議論をしてそれを実践すると。その一部を分担いただくという位置づけに現在の立命館の教職協働は立っているのではないかなと思っていて、それを大事に今後も育て、発展させていきたいと思っています。

中田 谷口候補。

谷口 はい。ちょっとそういう質問をされると僕は戸惑ってしまうんですが。というのは、元々生まれてから教職協働しかなかった。だから、それがどうですかと言われても困るので当然のこととして、私の表現としてはそういうことだと思います。教育というのは、多方面から見ないといけないと思っています。教員から見る目、あるいは教育される学生から見る目、それから職員から見る目、それがやはり総合して新しい教育の姿が出てくるんだろうと思っています。ですから、職員を抜きにしてとか、そういうことは私は教育現場ではありえないし、僕はそういう大学は潰れて行くんじゃないかなと思います。要するに、教育の見方が片面的になるんです、教員だけであれば。それは教育としては片手落ちだと思っていますから、当然のこととして受け止めていますし、当然発展していくものだという具合に受け止めています。

中田 川口候補。

川口 私は立場上、色んな大学を訪問したり、色んな大学の学長と話をしますが、彼らが異口同音に言うのは、お宅の職員は優秀だねと言われます。私は色んな話を聞いて、色んなことを耳に付け、立命館の色んな意味での発展、前進の原動力の大きな一つが職員の力になるというのが疑いのない事実だろうと思います。これは、なぜそういうことができたかということ、教職協働の中で職員自身に発言権がある、職員自身に決定権がある、職員自



身がいろんなことが提案できる、それがあからこそ職員の力量が伸びてくるんだろうと思いますし、それがなければこれははっきり申し上げますと、国立大学のように事例をいくら聞いても、職員さんにそういう権限が与えられていないから、彼らは伸びようがないんですね。ですから国立大学の困難さはそこにあると思います。立命館大学の教職協働は、今お二人がおっしゃられましたがもうすっかり定着していると思います。これが脅かされているという状況にはないと思います。これをしっかりと発展させて、さらにはもっと職員の色んな教育あるいは研究の場での活動を広げていく必要があるのではないかなと思います。私は、理工学部の若い先生方で周りに引き抜かれてもおかしくないような先生方になんで立命館に残っているのか、率直に聞いたことがあるんですね。彼らは職員が支えてくれるからここにいるんだよと言ってくれました。これはとても大事なことでありまして、先端研究をしていく上でも今の立命館の職員の力量があつてこそ可能になっている。これを私は総長としても力強く思っていますし、これからも伸ばしていきたいと思っています。以上です。

中田 はい。ありがとうございました。どんどん行きましょう。

杉浦 宇治中高の杉浦と申します。よろしく申し上げます。このような討論会が開かれていること、開くために多くの方が努力をされて4年前と違った形で総長選挙が開かれていること、それについてとても立命館人として誇りを持つし、質問できることを光栄に思います。質問させていただきます。附属校の教学の改善について質問したいんですが、教育体制整備に教育の質の向上は欠かせないと思うんですが、現在、各候補は質の向上を掲げられています。附属校の現状を少しお話させていただくと、三年限りの期限付きの講師、非正規雇用ですね、非常勤講師の方の割合が多くて三割近くを占めると拡大してきてしまいました。そういう方々が場合によっては一年目から担任を持ち、クラブ活動を持ち、本当に生徒の最前線に立っている、そういうことは非常に教育の継続性からしても、その比率が拡大してきていることも含めて、大きな課題を持っていると思います。初等、中等の教育の現場を励ますために、ST比の改善以外に何が教育の質の向上のために必要なのか、そこを三人の候補の方にお聞きしたいと思います。

中田 谷口候補、いかがでしょうか。

谷口 私は先ほどお答えしたように思うんですが、要するに基本的には私学ですので、限られた財源の中でどういう優れた教育をしていくかということを考えて行かなくてはいけないと思うんですね。その中でST比というのがあると思います。それで、この非正規雇用との関係ですが、先ほども言いましたように年寄り元気だと言いましたよね。たとえば一年生、二年生、三年生で責任の範囲は当然変わってくると思うんです。だから、それ

にふさわしい非正規雇用があるというのは、専任雇用ではまかなえない教育を増やしたいという気持ちがあるかと思うんですが、その中でね。やはりもう少し、社会に広く目を向けて、社会の力を借りる。いわゆる定年退職者であるとか、こういう方は教育経験が豊富だと思うんですね。そういう方々に力を発揮してもらえ部分があると思いますし、専任教員がしなければならぬ問題は何なのか、だから平等に当てるのではなくて、それぞれの持ち場持ち場にやはりふさわしい職種と言いますか、職種と言いますか、そういうものをまず考えていく必要があると思います。その中でやはりそれでも、なおかつ問題があるという問題については、専任教員を当てるのか非正規雇用を当てるのかは分かりませんが、それはその高校でお考えになったらいいと思いますが、教育上、非常に齟齬をきたすという問題については、やはり理事会としても考えなければいけないのではないかなと思います。まずはしっかりと宇治校は宇治中高のところでもまずお考えになるというのが私は基本だと思っています。

中田 川口候補、お願いします。

川口 私は今の宇治中高限らず、付属校の非正規雇用の増大はかねてからうかがっていましたが、課題であると認識しております。今のように多くなっているのは、教学上の問題が出ているという認識もしています。ですから、これは解決をしたいと思っております。その第一はST比を、教員を増やすと、専任教員の枠を増やしていくというのが第一の課題。だから、全体の専任教員枠の中で正規雇用をどれだけにするか、非正規雇用をどれだけにするかという比率を変えて行くということだと思えます。すでに08年に20年の専任雇用の枠の増加、STの改善について常任理事会として判断をしたと思えます。今後も継続的にこれをやっていきたい。しかもこれを学費を値上げしない形でどこまでできるかというギリギリの努力をやっていきたいということで、財務、一貫教育も含めて議論をしてもらっています。その中で専任教員の枠と非正規教員の枠、その比率をそこで是非、今の許される範囲で考えていただきたいというのが、これが一点です。もう一点は、今の非正規雇用の制度に問題がないかどうか。たとえば三年ということではこれを五年にできないかということもあるでしょうし、たとえば大学ではテニユアトラックと言いますが、非正規から正規へ移る仕組みができないものかとか、今の雇用制度についても是非検討をして、よりよい道を見いだすことが必要なのではないかなと思っています。

中田 坂根候補お願いします。

坂根 私は宇治高ではありませんが、守山の理数系教育でかなり深くかかわっていて、守山の外部評価委員をしております。内部にあるのかもしれませんが。初芝も接続校ですが、初芝プロジェクトの委員長をしているということもあり、付属校の先生方が今言われたよ

うに非正規雇用が 30%に達するというのは、非常に大きな問題であると思っています。特に担任が一年おきに変わるというのは、もし私がお子さんの親だったらショックを受けるだろうと思っています。ですから非正規雇用のあり方については、先ほど川口先生が言われたように再度検証する必要があるということと同時に、初芝に守山に私が改めて認識させてもらったのは、物理の科目に専任の方が非常に少ないとか、国語だったら国語、英語だったら英語に、やはりそれぞれの付属校に教科をリーダーシップを持ってリードできるような専任教員の方を複数で配置するとかいう政策を取る必要があるのではないかなという風に思っていますので、その点も含めまして、付属校の財政も見ながら今後議論していきたいと思っています。それともう一点、私が初芝や守山で受けた感じなんですけど、一貫教育の方々是非常にがんばっておられるんですけど、大学と付属校の関係がイマイチうまく情報交換ができていないのではないかと危惧を持っています。というのは、付属校の本当の悩みとか、そういうのが大学の方には聞こえてこないんですね。ですから一貫教育の風通しを良くする意味で一度検討する必要があるのではないかなと思っています。以上です。

中田 ありがとうございます。他にございますでしょうか。

石崎 経営学部の石崎ですが、昨日の教対会議で文学部で開設以来という大規模な改革案のアイデアをお聞きしたわけですが、今後の学園全体の発展を考えた場合に社系の改革が非常に重要なテーマになるのではないかと思います。この点につきまして、お三方の見解をお聞かせいただければと思います。

中田 それでは、川口候補をお願いします。

川口 私も同じ意見でありまして、社会科学系は立命館の中では最大の部隊でありまして、学生数、教員数も一番大きいところであります。ある意味では財政的にも支えてきたという部分もあるかと思います。色んな意味で立命館教学、小集団教育であるとか、そういうものも社系の中で典型的に行われてきたわけですが、社系教育の改革、社系における研究の発展こそある意味、立命館の教学の改革を大きく左右するという認識をしております。今、お話にありましたが、2012年に向けて理工学部、あるいは理工系、文学部の改革が次々と出てきている中で、社系教学をどうしていくんだということは当然問われてくると思います。私は今、議論されています小集団教育のあり方とか、卒業時の学力保証だとか、ゼミの必修化だとか、色んな課題も是非社系の中で正面から議論していただきたいという風に思っています。同時に立命館はこれだけ多くの社系を持ちながらも、私も社系なので特に思いますけれども、学部を越えた相互の連携のようなことをもっとやれないかなと。これは同じようなテーマを持って学部をわかれてやっていることによって十分に成果が実っていないということが沢山あると思います。そういうことが是非できるようにしていきたい

いと思っています。私は先ほども茨木キャンパスの問題で教学改革抜きにはあり得ないということをお話しましたが、そういうことを含めて新しいキャンパスの議論というのは、社系の新しい改革と、社系の相互の協力関係といったことを色んな分野で実現できないか、それを教育の面でも研究の面でも是非新しい陣地を開くということのをこれをきっかけにやっていきたいと思っています。

中田 それでは坂根候補をお願いします。

坂根 はい。社系の改革については、私も興味を持っておりまして期待もしております。ただし、今中期計画が議論の進行中でして、明日の理事会で最終報告書が議論される予定になっています。中期計画は2012年度までを見通したビジョンを示すということで、社系の改革自体も中期計画を各学部の教学改革をからめて具体化する中で議論したほうがいいんじゃないかなと思っています。中期計画自体は立命館大学の方向性を決めるものですから、それを各学部の教学改革や学部改革の中身に落とし込まないと中期計画は実現できないわけですから、そういう脈絡の中で社会の改革を議論できればいいのではないかなと思っています。冒頭に学部は、現場が責任を持つというお話をさせていただきましたが、やはりこれはどこからかこういう風にしたらどうだとアドバイスされるのは当然なんです、やはり当該の学部が教学のあり方をきちんと議論していただいて、新学部を作った方がいいということでありましたら、新学部を作ることについて、十分学部で議論が収束することを受けて、やるべきであると思っています。以上です。

中田 はい。谷口候補。

谷口 私は社系ではないんですが、時々社系の方と一緒に仕事をさせていただいております。理系の方とは違った色々な示唆に富むお話がありまして、なかなかワクワクすることがあります。それで、私が先ほども教育の点で申しましたが、社系にとって本当に何を目指しているのかということのを相当厳しく議論していく必要があるのではないかなと私は思うんですね。その中でこれからの学問というのは、社系、理系、文系もないんだという風に思うんです。その中でこの部分はどうしても残したい、でもこういう展開もあるよと言った時には、大胆に文系とか理系の壁を越えて、議論を展開すれば、僕は新しい社系の姿が見えてくると思うんですよ。どうも議論がもちろん坂根先生が先ほど現場にと仰ったんだけど、現場というのは僕は非常に大事だと思うんだけど、それと同時に、それを越えていく力というのも大学にとって必要だと思うんです。なぜなら大学というのは新しいことを創造してこそ大学の存在価値があるからなんです。新しいことを創造しない大学に何があるんですか。だから、学部はやはり新しい方向に何をしていかななくてはならないのか、時代の要請にどのように応えなければならないのかということのを考える中で、僕は

新しい領域に是非切りこんで頂きたいという風に考えています。たとえば今、課題になっています心理学という学問があるんですが、これは人文科学も社会科学も、脳科学も含めてライフサイエンスに大きく関わる分野なんです。そういう大きな仕組みをもって大学を展開していくということが僕は社系学部で籍を置かれる先生方の責任だろうと思いますし、立命館が生きるも死ぬもそれ次第だという風に思っています。

中田 ありがとうございます。当初の予定をちょっと激しくオーバーしているんですが、あと一つもしよければ御質問をお受けしたいと思います。

中島 法学部の中島です。大学では憲法を教えていまして、学問の自由というのを教えたりしているんですが、立命館大学が全国に誇り得る民主的な大学だというのは、学部長理事制だとか、教学優先の原則であるとか、全構成員自治の原則だとか、総長の公選制だというそういう制度で立命館学園が民主的に運営されてきたということですね。ところが学問研究と大学の管理運営は全く別問題だと前川本理事長が日本経済新聞で書かれましてね、その後、トップによる責任ある統治という形で色々大改革がなされてきたわけですね。先ほど職員自身が決定権があると言われましたけれども、必ずしもそういう事態ではなくて現場の発言力というものを必ずしも十分に生かしてこれなかったということが経過だと思います。そういうことから総長公選制が任命制に転換される、あるいは退任慰労金が大幅に増額されるという事態がありました。それで質問なんです、そういう今の各候補者が今の公選制の制度のもとで新しい立命館を創造していくんだと言われていたと思うんですが、それではかつて公選制から任命にされたこの前の総長選挙制度ですね、それについてどういう風に評価されているのか。今後新しい立命館を創造していくにあたって、そういう過去の事柄についてきちんとした総括をしておくということが、新しい民主的な立命館を作っていく上で必要だと思いますので、敢えて質問させていただきました。

中田 谷口候補いかがでしょうか。

谷口 今御発言になった過去の反省に基づいて、今回の総長公選制があると考えています。そういう意味で、今仰った過去の問題は、私はそこで一旦清算をしたいと思っています。私は総長公選制というものをもって、さらに大学を前に進めたいと考えていますので、すべては総長公選制の、今回の選挙制度が信頼回復を担保したものだと思っています。

中田 坂根候補いかがでしょうか。

坂根 はい。以前の総長の選任制度は色んな意味で問題があったのではないかなと認識しています。そういうこともあって、学部長理事として今回の選挙制度については見直しに

については積極的に関わって、積極的に発言をしてきました。今回の制度がベストではないにしろ、以前の選任制度よりもはるかに進んだという風に思っていますので、幸か不幸か進んだ段階で私が候補者になりましたので、そういう風に思っているということです。

中田 川口候補、お願いします。

川口 総長選挙の制度の改正については、広く全学の委員会を通じて議論してきました。そこで何を解決すべきかということについて相当丁寧に議論されてきました。私はその議論について、逐一報告も聞き、意見も言いながら、今日の選挙制度が作られてきました。そういう意味で、私が今までの委員会と別の見解を持っているということではありません。今度の新しい選挙制度に結実する議論を私は心から歓迎し、そこに私自身も参加して作り上げてきましたので、そういう立場から今度も総長選挙に参加しているという風にお話し申し上げたいと思います。

中田 時間を過ぎてしまいましたので、実は事前質問を他のキャンパス等々から受け付けています。その中で今回、質問があったあるいは非常に近い質問であったというものについては割愛したいと思いますがその中でも抜けている部分がありましたので、市川先生からお願いできますでしょうか。

市川 事前の質問を沢山お寄せいただきまして、感謝申し上げます。その中で、学費の話、留学生の話、国際的視点、教育の国際的視点、あるいは教職協働、それから付属校特に宇治校における非常勤比率の問題等はすでに事前質問にも出ておまして、質問されています。漏れている話として APU の話が漏れていますので、最後に事前質問の中から APU に関する質問をご紹介します、候補のみなさんの御意見をうかがいたいと思います。これは、APU のアカデミックオフィスの大澤さん、ファーストネームはちょっと字が読めないんですが、大澤さんという方からの質問で、総長に選出された場合、最優先で取り組もうと考えておられる APU の課題と、その対応策はどのようなものですかという質問がありますので、この APU の最優先に取り組みたい課題とその対応策について簡潔にお答えいただければと思います。

中田 川口候補、いかがでしょうか。

川口 APU は色々長期的な課題も含めてやりたいことはたくさんあるのですが、時間もありませんので、質問に即して、最優先に取り組みたいと思っていることについてお答えします。それは、私は入学政策に対する取り組みです。今、国際学生、国内学生ともに APU は本当に力を入れなければいけないし、全学をあげて支援をしていかななくてはならないと

思っています。国際学生の取り組みにつきましては、来月インドのオフィスが、デリーオフィスが開設いたします。それからもう少し先に中国の杭州オフィスも開設します。これは、グローバル30との関係で開設するわけですが、是非ともここで新たな国際学生の拠点として積極的に活用して新たなAPUの国際学生のリクルートに努めたいというのが一つです。もうひとつは国内学生についての取り組みです。国内学生につきましては、これまでどうしても大学の入学政策とともに展開してきたということがありました。これを今、やはり入学政策が違いますので、学生を取ってくる対象が違いますので、もっと独自にやろうということで、いわゆるAPU熱望層を開拓するというので、新しい努力を始めました。今年が最初の年になります。ここを何としても成功させたい。とりわけ私はAPUのAPUハウスを中心にしたラーニングコミュニティというコンセプトに基づく学びの姿を是非日本人学生に示すことによって、日本の国内学生の多くの募集につなげて行きたいという風に思っています。以上です。

中田 ありがとうございます。谷口候補。

谷口 はい。現在、アジアの諸国はすごく留学生獲得競争をしています。中国、シンガポール、台湾、韓国も含めてそういう中で日本は留学生の問題については苦戦をしているところがある正直な現状であります。その中でグローバル30も含めまして日本の大学では非留学生を要するに一定量、優秀な留学生を一定量確保していただいて、大学の活性化につなげて頂きたいと思っています。ひとつは、そういう獲得競争の中にAPUはまさに置かれているという状況ですので、一定の学力を担保するというのは、非常に大きな問題で、APUの先生方、職員の方が大変苦勞をされているのではないかなと思います。それから、留学生というと、奨学金というのがすぐに浮かぶんですが、中国には一定層のミドルクラスが増えています。相当数、何千万というレベルで増えています。実は私はこの間、留学生の1年生の理工系の授業をしているんですが、理工系ですら、立命館の高い学費で私費で学んでいる学生が増えているという現状があります。ということは、相当裕福層が増えてきているということは間違いのない事実でございます。それで、留学生は色々どこを狙うかということなんですが、やはり留学生を押し出す力を持っている国を集中的にこの留学生獲得に向かうということです。たとえば、中国、台湾、シンガポール、韓国、タイというような国が留学生を押し出す力が非常に強い国です。海外で、国として留学させたいという意欲が非常に高い国です。そういうところに力を注いでいただくということ。

それから、国内にあっては財政難の状況にあります。私も留学生政策に深く関わっているわけですが、今後国の留学生政策が確実に変わるということが予想されます。そういうことをきちんと見極めたうえで、APUの新しい留学制度を確立する必要があるのではないかと思います。また、国内学生の募集については、非常に苦戦をしているということを聞いています。このことは、やはり付属校との提携を強化していく必要があるのではない

いかと思います。宇治校とのバカロレアのコースがあるんですが、そういうことを強く連携する中で、APU で学ぶことの魅力を積極的に各付属校にアピールして、一定の学力を有する入学者を確保するということが必要だろうと思っています。

中田 坂根候補お願いします。

坂根 はい。APU の問題ですが、私も非常に大きな問題だと思っています。そういうこともありまして、先週実は APU に行ってみりました。何名かの方と懇談をしてみました。非常に厳しい指摘や御質問をされました。ひとつは財政問題であります。二つ目は G30 に立命館が認定されたことについても非常に厳しい見解を示されておりました。G30 の関係では立命館が留学生を取ったら APU の学生が食われるのではないかなという非常に厳しい、切実な思いでした。APU の最大の課題は、立命館学園の中で、立命館大学と APU の両者の相互関連や位置づけをどうするかということについて、やはり座っていないんじゃないかなと思いました。それと同時に、APU の情報が私も理事を 4 年間、3 年強しておりますが、APU の実態を立命館に伝えきれないというか、情報の交流に若干難があるのではないかなと思っております、やはり大学全体として APU をどうするかということ再度情報交換をしながら、位置付けて議論したいと思っています。以上です。

中田 そうしますと、もう時間が大幅に超過しておりますので、最後に今後の抱負というものを各候補より 2、3 分、1 分程度で頂ければと思います。最初の所信表明は 50 音順でお願いしましたので、今回は反対側ということで、谷口候補の方からお願いしてもよろしいでしょうか。

谷口 私の口から何度も何度も出ているキーワードは「信頼」ということです。R2020 を実現するのもみなさんの力です。みなさんの力は総長を信頼することについて、前へ突き進んでいくのではないかなと思っています。もうひとつのキーワードは「ゆとり」ということです。やはり学生さんが非常に厳しい環境の中で学んでいるという実態を私はしみじみ実感しております。この問題を解決していくのは心のゆとり、あるいは実際のスペースのゆとり等々が必要であろうと、非常に重要な課題ですから、この問題について取り組んで行きたいと思っています。以上です。

中田 坂根候補、お願いします。

坂根 先ほどから何度も申し上げておりますが、やはり現場に依拠することと、現場の先生方が学生実態や研究の実態をきちんと把握して政策化して、それを小さなステップでも一步一步実現するのが大事なことはないかなと思っています。これは 3 年半学部



長をさせていただいて身につまされて感じたことであります。と言いますのは、学部長がこういう改革をしようと言っても、先生方がそういう気にならなければ、何も進まないということを身を以て感じました。それと同時に学生さんが一回勉強してみよう、先生方がこういう学生に一生懸命教えてみよう、こういう研究をしてみようと思わなければ、やはり教学改革をいくらいったとしても一步も進まないということを経験して、そういう経験から現場に依拠するという話を何度も何度も、もう耳にタコが出来たと言われるかもしれませんが、申し上げさせて頂きました。そういう風に、私が総長に向いているかどうかは分かりませんが、もし選ばれば現場に出かけてみなさんと教学実態、学生実態を議論して悩み、政策化して、微力ではございますが、少しでも立命館学園を前に進める努力を一緒にしたいと思っております。

中田 川口候補お願いします。

川口 私も最後に今まで申し上げたことをまとめて行きたいと思いますが、私はもう一度、学びの場というものを課外、正課を越えて作っていくということをこの中期計画を通じて一步一步実現していきたいという風に思います。加えて、いくつかの質問の中でこれは谷口先生も言われた、信頼関係を作っていくということについては、やはり私としてはさらに努力をしてきたい。色んな制度作りという点では前進はしてきた。あと、心の問題が残っているなと思います。そういう意味で、率直にいろんな方との話し合いをしていきたいと思います。もう一点、これは十分言えなかった点ではありますが、総長のリーダーシップと関わりますが、外との関わりというのも役割としてあると思います。学園でいくら努力をしても、政府の政策であるとか、社会の環境の中で学園の中での努力ではどうしても突破出来ない問題が一杯あります。学費の問題もそうなんです。そこをもう一步突破する努力、それには総長が先頭に立たなければいけないと思います。